

聖徒の道

1984年4月20日発行(毎月1回20日発行)第28巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 4 1984





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクリー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
ハワード・W・ハンター
トマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシerton
フルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
フリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッケル
子供の貢編集：
ボニー・ソーンダーズ
レイアウト・デザイン：
マイケル・カワサキ

もくじ

たたえよ、主の召したまいし…ゴードン・B・ヒンクリー	1	
重んじられるべき書物	ジョン・W・ウェルチ	11
さまざまな声	ロバート・F・ボーン	19
質疑応答	カールフレッド・プロデリック	22
「シンディーに」	シンシア・ブラウン・スチーブンス	24
神権の祝福	エリナー・イエイツ・バートン	25
マシューから贈られたテキスト	デニーズ・ウォルシュ・ノートン	27
ペルーに残る白い神の伝説	カーク・マグルビー	28
委任するとき、しないとき	ウィリアム・G・ダイヤー	35
バスを乗り違えて	スターリング・W・シル	40
トマス・ケイン	スザン・アーリントン・マドセン	44
ニタのひつじ	エリザベス・フリット	47
かみさまとのやくそく	パット・グレアム	52
私はこうしています		54
ローカルページ		56

1984年4月号 聖徒の道 第28巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円、大会号350円

International Magazine PBMA0449JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1984 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申込み用紙」でお申し込みになるか。または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……
〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部渋谷ブックセンター/☎03-454-1617(代)

大管長会
メッセージ

たたえよ、

主の召したまいし



第二副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

何 年も前に私が12歳で執事に聖任されたとき、ステーキ部長であった父は私を初めて神権会に連れて行ってくれました。当時は神権会が週日の夜に開かれていました。ふたりでユタ州ソルトレーク・シティの第10ワード部に行ったことを覚えています。父は壇に上がり、私は後方の席に腰かけて、堂々たる神権者たちで埋まったホールの中で居心地の悪さと多少の寂しさ

を感じていました。会が始まり、開会の讃美歌が発表されて、当時のやり方はそうだったのですが、全員が起立して歌を歌いました。400名ほどの出席者であったと思います。ヨーロッパからの改宗者の母国なまりもまじえて、全員が声高らかに、確信と証に燃えてこう歌いました。

たたえよ、主の召したまいし
主と語りし予言者を

末の時をはじめたら
わざを世みな嵩めよ
(讃美歌144番)

神権者たちは予言者ジョセフ・スミスのことを行ってきました。それを聞いている私の胸に、この神権時代の偉大な予言者に対する愛と信頼がいっぱいに込みあげてきました。私は子供時代に、家庭やワード部の集会やクラスでジョセフ・スミスについていろいろと教えられていきましたが、そのステーク部神権会での経験はそれとは違ったものでした。私はそのとき、聖霊の力によって、ジョセフ・スミスが真実の予言者であることを知ったのです。

それ以後、大学時代は特にその証が揺れることはあったのですが、確信がまったくなくなることはなく、逆に年を経るにしたがって強くなっていました。それはひとつには、あの頃、本を読み勉強して自分を強くするようにということがしきりに言われていて、頑張ったせいであると思います。大勢の方が似た経験をお持ちでしょう。ハロルド・B・リー大管長が、証は毎日補充しなければならないとおっしゃったことがあります。天の神がこの末日に恵まれた大いなるみ業に対する証を、リー大管長が言われた原則に従って強めたいものだと思います。

数年前に、私はある伝道師から1通の手紙を受け取りました。その人は予言者ジョセフ・スミスをぺてん師、詐欺師、うそつきと呼び、ジョセフは自分の考えを宣伝して歩いただけだと言って、激しい言葉で非難していました。この伝道師の仕事が一体どんな結果をもたらしたか、私にはわかりません。

ません。取るに足らないものだったでしょう。このような行ないは、弱い少数の人をぐらつかせることはできても、強い人はさらに強くするだけです。このようなたぐいの人々が沈黙したずっとあとにも、ジョセフ・スミスの名は、多くの国々で増加の一途をたどる末日聖徒の胸に敬意と愛をもつて覚えられるのです。

かつて伝道部長セミナーのために、七十人定員会のふたりの兄弟と12名の伝道部長が夫人同伴でジョセフの市、イリノイ州ノーヴァーに滞在したことがあります。私も一緒にでした。秋の気配があたりをおおい、木の葉は金色に変わって、もやがうっすらたちこめ、夜は寒く、日中は暖かでした。観光シーズンは終わっていて、町はひっそりと美しいたずまいを見せていました。セブンティーズ・ホール私たちちは復元された七十人会館で最初の集会を行ないました。七十人会館とは、1840年代に兄弟たちが、共に学び共に王国の教義を教え合うことにより、福音のおとずれを宣べ伝えに世に出て行く備えをなした建物です。ここで行なわれたことは、教会の宣教師訓練センターの先がけでした。ノーヴァーの家々や建物で集会を開いたとき、ジョセフやハイラム、ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ジョン・ティラー、ウイルフード・ウッドラフ、オルソン・パーレーのプラット兄弟、その他数多くの過去の偉人たちが共に集っているような思いがしました。

そこはまさにジョセフの市でした。予言者自身が町を設計し、予言者に従う人々が町を建てました。この町はイリノイ州最大の最も印象的な町となりました。頑丈なれ



たたえよ、主の召したまいし

んがの家並、礼拝や勉強や娯楽のための建物、川からせり上がる丘の頂上に立った堂塔たる神殿。ミシシッピ川のほとりのこの共同体は、建設者たちが百年以上も腰を据えるかのように作られていました。

そこで、あのカーセージの悲劇の日まで、予言者はこの世の働きの絶頂期を送りました。予言者がかつて立った場所に自分が立って町をながめると、彼をこの地に導いた数々の出来事が胸に浮かび、予言者の受け継いだ遺産というべきものに思いをはせたのでした。幾世代も前に英國諸島を去ってボストンに来た先祖、父方5世代、母方4世代の新世界での生活、マサチューセッツ州、ニューハンプシャー州、バーモント州の土地の開墾と農場作り、家の建設、独立戦争でのすぐれた働き、家周辺の花崗岩山地に暮らしを頼ろうとして失敗した逆境の時期。そして、1805年12月、バーモント州シャロンに父の名をもらって生まれた少年のことを思い出しました。一家がチフスに見舞われ、ジョセフの足が激しい痛みと熱を伴う骨髄炎に冒されたあの恐ろしい闘病の時期のことも考えました。それは一家がニューハンプシャー州レバノンに住んでいた間の出来事でした。そこからわずか数キロ離れたハノーバーの大学に、足を切断せずに行なう手術法を開発したナサン・スミス博士がいたことは、注目に値します。

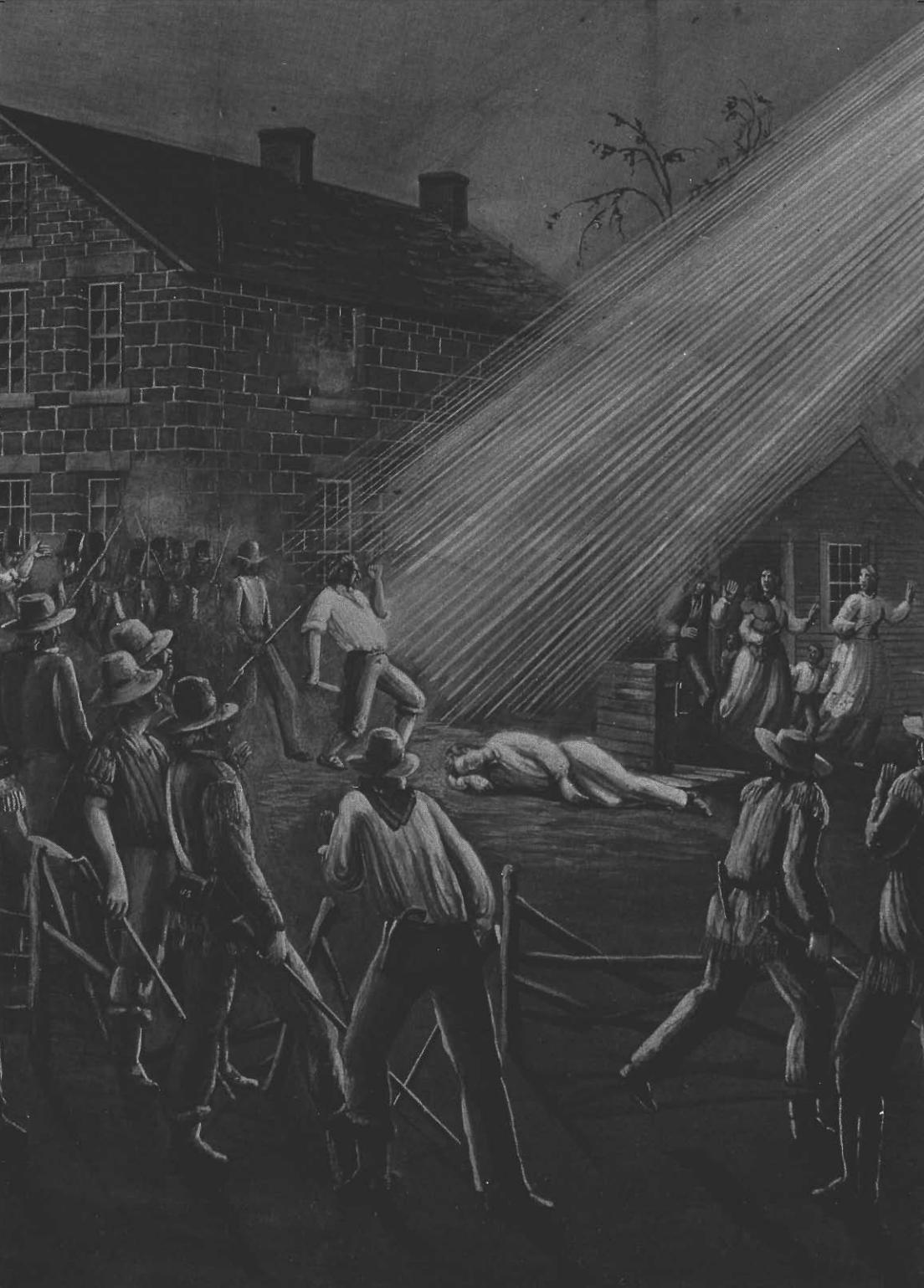
しかし治療には、言語に絶する苦しみが避けられませんでした。父親は息子をしつかり抱き、母親は息子の絶叫が聞こえないように農場の林の中を祈りながら歩き回る中で、医師が麻酔も何も使わずに足を大きく切開し、骨の感染箇所を削り取ったので

す。まだ小さい子供がどうやってそれに耐え得たか、私たちには想像するのもむずかしいことです。その極度の苦痛に耐えた思いは、のちにカートランドで熱いタールと羽毛を塗り立てられ、リバティーの牢獄に拘置され、カーセージで暴徒の凶弾を受けたときの備えともなったのではないでしょうか。

ジョセフ・スミスの生涯をじっくり思い起こしたとき、住みなれたニューアングランド地方からニューヨーク州西部へスミス家を移らせたものは何であったかと考えました。それは、定められていた神の目的が成就されるためだったのです。農場を失ったこと、やせた土地で収穫が少なかったこと、そして決定的だったのは、1816年7月の大霜害でした。^{だいそうがい}さらにはニューヨーク州バルマイラへの引っ越し、マンチェスターにおける農場の購入。そして迷った少年ジョセフに神に祈り求めようと決意させた信仰復興運動の牧師たちがいました。

それが万事の発端でした。1820年の早春の朝、彼は林の中でひざまずき、祈って、榮えある示現を見、永遠の父なる神とその御子、復活された主イエス・キリストと言葉を交わしたのです。その後に訓練の年月が続きました。神の天使が何回となく少年ジョセフを教え、戒め、警告し、慰めて、やがて彼は青年に成長しました。

私はノーヴーに滞在していた間に、神権を授かる準備についても考えました。この立派なジョセフ・スミスについて考えました。ジョセフ・スミスを中傷する人々に、聖霊の力による彼の予言者の召しについて知っていただくことはできませんが、ジョ



たえよ、主の召したまいし

ジョセフは、聖徒たちが引き続き多くの艱難にあり、ロッキー山脈に追われることを予言しました。



セフ・スミスを葬り去ろうとする前に、いくつかの質問について考えていただきたいと思うのです。いくつもある中から3つだけあげましょう。1番目に、モルモン經についてはどう説明しますか。2番目に、命をかけて彼に従った人々への影響力をどう考えますか。3番目に、ジョセフ・スミスの予言が成就されていることをどう思いましたか。

ここにモルモン經があります。文章を読みます。それがもともとどのようにして得られたか、ジョセフ・スミスの説明があります。信じない人にとっては受け入れがたい話です。またこの話を論ばくし、予言者ジョセフの説明以外に解釈を見つけようとして

して、昔から批評家たちが一生をかけて數々の本を著わしました。しかしこの重要な書物は、偏見を持たない人々に対しても逆にもっと掘り下げてみようという気持ちを促したのでした。そして深く調べれば調べるほど、ジョセフ・スミスの話が確かにすることが証明されてきたのです。学問的分析や科学的研究は、依然として裏付けとはなりますが、それらは過去150年間と同様に、これからもモルモン経の真実性を決めるものではありません。モルモン経の出所の確かさは、過去と同様現在も将来も、敬虔な心と祈りの精神でそれを読むことによって知ることができるのです。

しばらく前に、私はひとりの父親から手



紙をいただきました。その手紙には、以前の総大会で私がモルモン經を読むように勧めたので、大勢の優秀な人々に多大な影響を与えた初版のモルモン經を、家族で読むことにしたと書いてありました。私は彼への返事に、良いことですが、このすばらしい書物の精神に触れるのにだれも初版を求める必要はありませんと書きました。今年中に印刷される100万冊以上のモルモン經の1冊1冊が、初版と同じ精神を持ち、同じすばらしい約束を告げ、この書物の真実性について同じ証をもたらすのです。

モルモン經は、祈りと誠実な探求心をもって接するべきもの、読むべきものです。この書物が世に出て以来153年間の批評家たちの主張はすべて信頼性を欠き、祈りの心でそれを読み聖霊の力によってそれを確かにものとして受け入れる人々には、何の影響も与えませんでした。ジョセフ・スミスの神聖な使命を証明するものがほかにないとしても、モルモン經がまぎれもないその証人です。靈感を受けずに、これほど大勢の民に奥深い良い影響を及ぼす書物を著わすことができるとは、とても考えられないことです。モルモン經が真実であるという証は、これまでにこの書物を読み、この書物について祈って確かであるとの証を受けた、過去、現在の何百万という人々の生活の中に見いだされるのです。

次に2番目の質問です。命をかけて雄々しく彼に従った人々への影響力をどう説明しますか。これも見すごせないです。ジョセフ・スミスの指導力を疑う人は、彼のもとに来た人々を見てください。富を求めたのではありません。政治勢力を持とう

としたのでもなければ、兵力獲得をめざしたのでもありません。ジョセフ・スミスが彼らに与えたのはそのようなものではなく、ただ、主イエス・キリストへの信仰による救いにかかわることだけでした。そしてそれには、欠乏や苦痛をもたらす迫害、長期にわたる孤独な伝道、家族や友人との別離、さらには多くの場合、死までが伴っていたのです。

オルソン・ハイドの場合を見てみようと思います。ハイド兄弟は、若き予言者ジョセフ・スミスと出会ったときには、カートランドの村で洋装材料店の店員をしていました。ジョセフが主のみ名によって、オルソン・ハイドは「人々より人々へ、國より國へ、悪しき人々の^{かほり}^{おひ}集りに於て、また彼らの会堂に於て生ける神の『みたま』によりて永遠の福音を宣べ、且つすべての聖典に關して論じ、これを彼らに解き明すべき聖職の接手任命を受くることによりて召されたり」(教義と聖約68:1)と告げたのは、布地やボタンや糸の商いをしていた前途も知れぬ無名の若者だったのです。

村の店員であったこの青年は予言的なその召しに靈感を受けて、「すべての聖典に關して論じ、これを彼らに解き明」かしながら、ロードアイランド州、マサチューセッツ州、メイン州、ニューヨーク州と、徒歩で3,200キロの道のりを旅しました。

ノーヴーのオルソン・ハイドの家を思い出します。居心地の良い家でした。ハイド兄弟はその家をあとにして、イギリス、ドイツを回り、トルコのコンスタンチノープル(現在のイスタンブル), エジプトのカイロ, アレキサンドリヤを通ってエルサレ

たたえよ、主の召したまいし

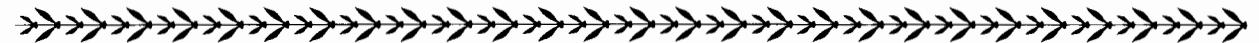
ムに到着し、1841年10月24日、オリブ山上で聖なる神権の権能により、パレスチナの地をユダヤ人集合の地として奉獻したのでした。それは、テオドール・ヘルツル（1860—1904）がユダヤ民族の故国集合の事業を始める25年前のことでした。

もうひとり、ウイラード・リチャーズの例をあげます。彼は教養のある人で、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスがイリノイ州知事のもとへ出頭してカーセージの獄にとらわれたとき、一緒に投獄された少人数の中のひとりでした。1844年6月27日の午後までにほとんどの兄弟が用向きを帯びて帰され、予言者と兄のハイラムとともに残ったのは、ジョン・ティラーとウイラード・リチャーズだけになりました。その夕方食事のあとで、外に暴徒が来ていることを知った看守が、監房に移った方が安全であると言いました。ジョセフの「私たちが監房に行くときには、あなたも一緒に行きますか」との問い合わせに対し、リチャーズ長老はこう答えていました。

「ジョセフ兄弟、あなたは川を渡るときにはそのように尋ねませんでした。カーセージへ来るときも、獄舎に入るときも尋ねませんでしたね。だのに、今私があなたを見捨てると思うのですか。私がどうするかお話しましょう。もしあなたが反逆罪で絞殺されることになったら、あなたに代わって私がその刑を受けましょう。そしてあなたは自由になるのです。」（B・H・ロバーツ「教会歴史」2：283）

強い人々、聰明な人々は詐欺師に対して
このような愛情は示しません。この愛は、
高潔さに打たれた人々に訪れる神よりの愛





紙をいただきました。その手紙には、以前の総大会で私がモルモン經を読むように勧めたので、大勢の優秀な人々に多大な影響を与えた初版のモルモン經を、家族で読むことにしたと書いてありました。私は彼への返事に、良いことですが、このすばらしい書物の精神に触れるのにだれも初版を求める必要はありませんと書きました。今年中に印刷される100万冊以上のモルモン經の1冊1冊が、初版と同じ精神を持ち、同じすばらしい約束を告げ、この書物の真実性について同じ証をもたらすのです。

モルモン經は、祈りと誠実な探求心をもって接するべきもの、読むべきものです。この書物が世に出て以来153年間の批評家たちの主張はすべて信頼性を欠き、祈りの心でそれを読み聖霊の力によってそれを確かなものとして受け入れる人々には、何の影響も与えませんでした。ジョセフ・スミスの神聖な使命を証明するものがほかにないとしても、モルモン經がまぎれもないその証人です。靈感を受けずに、これほど大勢の民に奥深い良い影響を及ぼす書物を著わすことができるとは、とても考えられないことです。モルモン經が真実であるという証は、これまでにこの書物を読み、この書物について祈って確かにとの証を受けた、過去、現在の何百万という人々の生活の中に見いだされるのです。

次に2番目の質問です。命をかけて雄々しく彼に従った人々への影響力をどう説明しますか。これも見すごせないことです。ジョセフ・スミスの指導力を疑う人は、彼のもとに来た人々を見てください。富を求めたのではありません。政治勢力を持つ

としたのでもなければ、兵力獲得をめざしたのでもありません。ジョセフ・スミスが彼らに与えたのはそのようなものではなく、ただ、主イエス・キリストへの信仰による救いにかかるだけでした。そしてそれには、欠乏や苦痛をもたらす迫害、長期にわたる孤独な伝道、家族や友人との別離、さらには多くの場合、死までが伴っていたのです。

オルソン・ハイドの場合を見てみようと思います。ハイド兄弟は、若き予言者ジョセフ・スミスと出会ったときには、カートランドの村で洋装材料店の店員をしていました。ジョセフが主のみ名によって、オルソン・ハイドは「人々より人々へ、國より國へ、悪しき人々の集りに於て、また彼らの会堂に於て生ける神の『みたま』によりて永遠の福音を宣べ、且つすべての聖典に関する論じ、これを彼らに解き明すべき聖職の按手任命を受くることによりて召されたり」(教義と聖約68:1)と告げたのは、布地やボタンや糸の商いをしていた前途も知れぬ無名の若者だったのです。

村の店員であったこの青年は予言的なその召しに靈感を受けて、「すべての聖典に関する論じ、これを彼らに解き明」かしながら、ロードアイランド州、マサチューセッツ州、メイン州、ニューヨーク州と、徒歩で3,200キロの道のりを旅しました。

ノーヴーのオルソン・ハイドの家を思い出します。居心地の良い家でした。ハイド兄弟はその家をあとにして、イギリス、ドイツを回り、トルコのコンスタンチノープル(現在のイスタンブル)、エジプトのカイロ、アレキサンドリヤを通ってエルサレ



です。それはみたまの現われであり、人類のために命を捨てて「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」(ヨハネ15：13)と言われた救い主の模範にならうものです。

ほかにも大勢の人々がいます。ヤング家、キンボール家、ティラー一家、スノー一家、プラット家など、数えきれません。彼らはみな、ジョセフ・スミスに初めて会ったときには平凡で先行きも約束されないようでありながら、真理と、ジョセフ・スミスの回復した神権の力のもとで、人々への奉仕を通じて偉大なことを成し遂げ、巨人となつたのでした。

最後に、ジョセフ・スミスの予言についてはどうでしょうか。すでに成就されている予言が少なくありません。最も知られているのは、1832年のクリスマスの日に語られた南北戦争についての啓示です。当時南部諸州一般に行なわれていた奴隸制度を憂える心ある人が大勢いて、制度の廃止について議論が沸騰していました。しかし神の予言者をおいて、だれが実際の出来事より39年も前にこう言うことができたでしょうか。

「そは間もなく南カロライナの叛乱に始まり……戦争はこの地に始まりてついにはすべての国民の上に押しよする時來らん。……南の諸州は北の諸州に反して分裂し、……」(教義と聖約87：1－3)この注目すべき予言は、1861年、サウスカロライナ州チャールストン港のサムター要塞が砲撃されて現実となりました。ジョセフ・スミスは、39年後の出来事をどうしてこのように正確に予見できたのでしょうか。予言のみたまを受けていたからにはほかなりません。

あるいはまた、聖徒たちのグレートソルトレーク盆地への移住に関する、これもまた顕著な予言について考えてみてください。当時聖徒たちは、ノーヴーとミシシッピ川対岸の入植地において、過去には味わうことのなかつた繁栄を楽しんでいました。神殿やその他の立派な建物が建設されていて、新しい人々は長持ちのするれんが造りでした。ところが1842年8月のある日、ジョセフはモントローズを訪れたときに、聖徒たちが引き続き多くの艱難かんなんにあい、ロッキー山脈に追われ、背教する者が多く、迫害者に殺されたり疲労や病気で命を落としたりする人々も出、「(目の前にいる人々に向かい) このうちの何人かは生きのびて居留地作りに加わり、町々を建て、聖徒たちがロッキーの山間で強大な民となるのを見るであろう」と予言しました。(「教会歴史」5：85参照)

時と環境から見て、この声明は驚きに値します。自分の能力を超えた知識を持つ人のみが、文字通りに成就されたこの言葉を語ることができたのです。

それでは、この教会の喜ばしい将来をはるかに見通した予言についてはどうでしょうか。

「いかなる汚れた者の手も、このみ業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国々に広まり、あらゆる者の耳に達し、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして、大いなるエホバは、み

業は成ったと告げられることだろう。」(「教会歴史」4 : 540)

ジョセフ・スミスのビジョンは壮大でした。それは、国を問わずあらゆる国民と、かつて地上に生きたすべての人間を網羅したものでした。過去現在のどの人間が、無知でなくしてジョセフ・スミスに悪口を浴びせられるでしょうか。彼らはジョセフの言葉に触れず、彼についてよく考えず、また祈ることをしていないのです。私はジョセフについてよく考え、祈った者のひとりとして、彼が全能者のみ手に使われて新たな最後の神権時代の先触れをすべき神の予言者であったことを証いたします。予言者ジョセフ・スミスについて、このように言うことができます。

「人がみずから唱道した主義のために命を捧げるとき、彼は同世代と将来の世代が問うてしかるべき誠実さと真実との最高の試しをくぐり抜けたのである。彼がみずから述べた証のために死ぬとき、惡意の舌は以後すべて沈黙すべきであり、かくも完き犠牲の前に、声はすべて敬意をこめて静まるべきである。」（エズラ・ダルビー、1926年12月12日）

主なるイエス・キリストの大いなる末日
のしもべ、ジョセフ・スマスを称えて、今
日ここでこう歌うのはいかにもふさわしい
ことです。

神権とみさかえをもて
鍵を永遠に彼持つ
古き予言者とともに
主の王国に入らん
(讃美歌144番)

ホームティーチャーへの提案

担当家族との話し合いの中で、以下の点を強調するとよいでしょう。

1. モルモン経は、ジョセフ・スミスの使命が神から託されたものであることを論ばくの余地なく証明するものである。しかしその出所の真実性は、読む者が敬意と祈りをもって読むことによって判断される。
 2. ジョセフ・スミスを通して回復された真理と神権の権能のもとに、もとはごくありふれた平凡な人々が、奉仕のみ業を遂行する巨人となつた。
 3. 予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた予言は成就した。

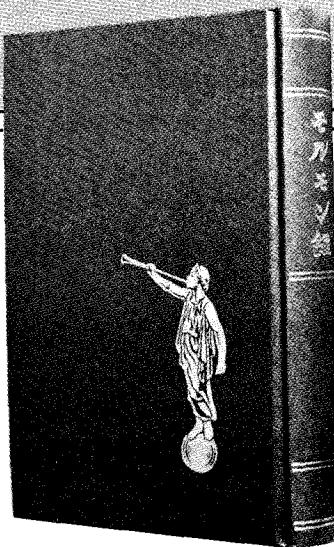
話し合いを進めるために

1. 予言者ジョセフ・スミスについて、自分の感じていることや経験を述べる。家族にも感じていることを話してもらう。
 2. 家族が声を出して読み、話し合うことのできる聖句や引用文が、この記事の中にあるだろうか。
 3. 訪問の前に家長と話し合った方が、レッスンの内容に深みが出てくるのではないか。定員会指導者や監督から家長へ、予言者ジョセフ・スミスについてのメッセージはないだろうか。

重んじられるべき書物

ジョン・W・ウェルチ

学者たちに、改宗とまではいかなくともモルモン經について納得してもらえるのは明らかです。



長 年にわたりモルモン經は、私に重要な事柄をいろいろと教えてくれました。私は、モルモン經には格別の敬意を払うべきだと思います。

モルモン經は、私にとって実に驚嘆すべき書物です。学べば学ぶほど、正確さや一貫性、妥当性、永続性、洞察や意義の深さにおいて、その感を強くします。

超自然的な形で保存された書物だからそのはずだというのではなく、優れた文学作品はどれも読み手に並々ならぬ畏敬の念を抱かせるという意味で、この書物はなお驚嘆すべきものです。そう考えると、正確な尊い記録として、私がモルモン經に寄せる

崇敬の念はいくら述べても述べ尽くすことできません。

私はずっと以前からモルモン經の価値を知り、大切に思ってきました。しかし、この書物がことさらに重んじられて当然であると感じ始めたのは、この書がそれ自体、学者たちへの証明であることに気づき始めてからでした。モルモン經は知的な観点から称賛を受けているとはっきり言うことができます。内容から見て、一般的標準のど

重んじられるべき書物

モーサヤ5：10-12に 見られる交差配列の例

- A また誰でもみな喜んでキリストの御名を引き受けない者は、
- B ほかの名で呼ばれる。
- C 従って、かれは神の左に居るのである。
- D 私はお前たちが、キリストの御名はすなわち……忘れないように望む。
- E 決してこの名前は消されるはずがないから、
- F 罪悪を犯すのでなければ
- F 罪を犯して……用心をせよ。
- E その心からこの名前が消されないように
- D また私は……忘れないように望む。
- C お前たちが神の左に居らず……
- B お前たちを 招きたもう声……を (呼び)聞いて
- A お前たちを呼びたもう名前

(訳注 日本語訳では文章の句が前後しています。英語のモルモン経を参照してください)

れに照らしても、古今の名著のひとつとされるに十分です。それを裏付けるのは、ここ数十年間に次々と発見されて、宗教書に対する学者たちのある種の固定観念を根本的に変えた古代の宗教文書を初めとするさまざまな資料です。

知識人にこの資料をモルモン経と関連づけて示すことには、おのずから問題があります。聖霊の力に頼ろうとする人はほとんどいないと思うからです。しかし、その中の大勢がたとえ改宗しないとしても、モルモン経について納得したなら、意義は大きいと思うのです。また、証というものは学問的な理論や結論の所産では決してありませんが、知識が力となって靈的な感性を育む人々はいます。

私たちの大半は、すでにモルモン経に人を改宗させる力があることを経験しています。その説得力について、少し考えてみてください。モルモン経は自分の「情」に力強く働きかけるばかりか、「知」に対しても雄弁に語っていると思います。モルモン経は、思慮深い人々に、それが真剣に受け止められるべき書であることを納得させるだけのはかり知れない力を持っているのです。そのことを証明するのに、例をいくつかあげてみようと思います。

ドイツで、レーベンスブルク大学の著名な教授の集中講義に出席した際、マタイ伝とマルコ伝の交差配列法がテーマに取りあげられたことがありました。交差配列法というものは、聖書によく用いられている古代の文学上の技法のことです。文の初めの部分が最後の部分と対応し、2番目の部分が最後から2番目の部分と対応し、そのよう

重んじられるべき書物



トと手を結んでいました。モルモン経の民はシドンの名をよく使っています。サイドンという名の町がありますし、サイドン川やギドギドーナという人も出てきます。このギドギドーナは、ブリガム・ヤング大学のヒュー・ニブレー教授が指摘するように、シドンのエジプト名です。ところがテュロス（ツロ）の名はモルモン経にまったく出てきません。旧約聖書ではこのふたつの名は常に対をなしていて、片方だけということはめったにないというのです。モルモン経でテュロスよりもシドンが好まれるのは、リーハイが知っていた当時の世界情勢に合致します。また、リーハイは外国都市と密接なつながりを持つ商人で、他の都市国家に滞在する外国人を保護した「チュワ」すなわち友好協約によって繁栄と安全を保証されていたと見るニブレー兄弟の推論を支持する形になります。リーハイはエジプト人を知ってはいたが、それでも自国が危険な道へ向かうを見て、エレミヤと同様にイスラエル、エジプト間の同盟を危惧したというのは自然です。（「モルモン経へのアプローチ」p.52 参照）

その優れた学者と討論したい事項はほかにたくさんありましたが、私は初め、むずかしいミーティングになりそうで心配でした。彼はモルモン経を何章かすでに読んでいて、初めて読んだにしては内容をかなりよく理解しているにもかかわらず、モルモン経を内容のないものと結論づけていたのです。私たちは彼の見た箇所をもう一度見てみました。また、角度を変えて何度も読み返しました。何時間もじっくり話し合つたあとで、彼はモルモン経が決して空疎な

ものでないことを、心から認めてくれました。彼は、「あなたの本は、本腰を入れてからなければなりませんね」と言っていました。

私はブリガム・ヤング大学4年生のときに、合衆国の元大統領にちなんで名づけられた米国ウッドロー・威尔ソン奨学基金に応募しました。この審査では30分の個人面接が重要視されており、そこで3名の試験官からいろいろと質問されるのです。私の面接は中頃まで具合良好いきましたが、急にひとりの試験官が話題を変えました。提出書類の中にブリガム・ヤング大学出版局から出したモルモン経についての論文があり、彼はそれをもとに質問したのです。試験官は挑戦的に、「モルモン経は聖書の焼き直しではないのですか」と私に聞きました。

それからの5分間は緊張しました。私はモルモン経が聖書と明確に異なっている点をいくつかあげようと思いました。たとえば両方の書物に出てくる山上の垂訓ですが、欽定訳聖書には「兄弟に対して（故なく）怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない」（欽定訳マタイ5：22）とあります。かつこの言葉は、マタイが書いたずっとあとになって加筆されたものと見られ、最初の新約聖書の原稿にはその部分がありませんし、モルモン経にもありません。（IIIニーファイ12：22参照）私はまた、モルモン経に載っているイザヤ書からの引用文と聖書のその言葉との相違点を指摘し、モルモン経と、聖書に登場しないユダヤ独特の比喩描写の重要な類似点（特に生命の木とヨセフについて）をあげ、最後にモルモン経の予

言者たちが独自に書いた詩を取りあげました。

私の返答で納得してもらえたと思うのは、少なくともふたつ理由があります。ほかのふたりの教授のうちのひとりが、しまいに「私には盗作とは思えませんなあ。あなたはこれまでモルモン経を読まれたことがおありですか」と辛らつな言い方で質問をやめるようにうながしたことと、その審査に通って奨学金が受けられたことです。

私は大学卒業後、英国のオックスフォード大学でギリシャ哲学の研究を続けましたが、ここでもいろいろな機会を見つけてモルモン経を大勢の学者に紹介しました。ある晩数人の新約聖書学者が、古代ギリシャの知的概念が初期のキリスト教思想にどう影響しているかという討論を始めました。話は進み、やがて初期ギリシャ哲学の発展に相反するものが寄与した役割に及びました。例をあげると、紀元前6世紀のヘラクレイトスという哲学者は、宇宙の相反するものの問題に深い関心を持ち、それらの相反する現象を越えたところに調和を見ようとしました。私はそれについて、リーハイの「すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……すべての物事はみな合して一つとならなければならぬ」（IIニーファイ2：11）という教えることを話しました。参加者たちの反応は好意的でした。この文章について、特に相反するものに関するリーハイの単なる具象以上の精神的思想の面から、もっと深く知りたいと関心を寄せる人が何人かいました。

その後、私はノースカロライナ州のデューク大学に通い、いわゆる偽書として知ら

重んじられるべき書物



知っている人も少ない「ゾシマスの話」には、リーハイのような、神に導かれてエルサレムを去った義人の家族のことが述べられています。

れるイエスの時代のユダヤ人やキリスト教徒の書き物について研究する大学院セミナーに参加しました。私はセミナーの席で折モルモン經について話しましたが、同席者は私の意見をはじめに取りあげませんでした。セミナーの終わり近くになると、専門分野では高名なその教授から、特に難解で知っている人も少ない「ゾシマスの話」に取り組むようにという提案が出ました。「ゾシマスの話」には、紀元前600年頃、エルサレムがバビロニヤに滅ぼされる前に、神に導かれてある正しい家族がエルサレムを去ったこと、彼らは祝福の地へ逃れ、そこで爪を使って文字が書ける軟らかい金属板に記録をつづったことが書かれています。話では、ゾシマスは夢の中でその民を訪れるなどを許されます。彼は荒野を旅し、厚い暗やみの霧を抜け、海を渡って、清い実をならせ蜜のように甘い水を流す1本の木のところからその地へたどり着きました。
(Iニーファイ8:10-12; 11:25に同様の叙述があります)

この近東の文書を専門的な角度から少し検討したあとで、教授は学生たちに質問しました。「では、ゾシマスの話はどう解釈したらよいでしょうか。これはユダヤ人とキ

リスト教徒とどちらのものだと思いますか。」出席者からほとんど発言はなく、分類できないことになりそうな気配でした。この話は、それまで見てきたどの文書にも似ていなかったからです。私はもうそれ以上待ちきれなくなって、リーハイとその家族について、またさらにモルモン經について、グループの人々に話をしました。私が話し終えると、部屋はいっそう静まりかえりました。すると教授が「皆さん、このモルモン經についてもう少し言いたいことがあります」と述べ、交差法の存在やアルマ書13章のメルケゼデクの記述や、そのほか私と以前個人的に話し合ったいくつかのことを説明し、「さて、このモルモン經はどう見たらよいでしょうか」と質問したのです。メンバーの中には、つまるところジョセフ・スミスをユダヤ人律法学者の生まれ変わりとすれば一番手っ取り早いと言う人たちもいるにはいましたが、私にとってうれしかったのは、それまでモルモン經に対して一番批判的な態度をとっていた学生が、もっと知りたいがどうしたらよいかと聞いてきたことでした。

私の経験したこれらのこととは、どんな意義があるのでしょうか。個々の出来事をと

重んじられるべき書物

ればとりたててすごい経験ではありません。人々がモルモン經を真剣に読むようになるときには、大勢の人が似たような体験をしているのです。一つ一つは取るに足らなくとも、その経験が合わさってモルモン經に対する大きな証となります。

モルモン教徒でない知識人が、モルモン經を気軽に無視するのはおそらく簡単でしょう。教育を受ければ受けるほど、この書物を見くびる傾向はあります。金版、天使、少年予言者など、利発な学者には超自然界の物語のように聞こえます。見たところ平易な文体で、古代ヘブライの聖典との関係が明白なため、無意味であり、単純なごまかしだという声を聞きもします。しかし、よくよく検討すれば、これは決して無意味どころか、愚かなのはかえって傍観者の方です。モルモン經の傍観者が犯すひとつの大きな誤ちは、調べもせず理解もしないのに、ものわかりよく判断を下してしまうことです。

大学院セミナーでの経験や、オックスフォードの学者たち、審査員や研究員、神学者、教授といった人々との出会いは、そのこととどんな関係があるのでしょうか。ごく簡単に言えば、それはこのようなことです。私の経験からして、モルモン經は見事な主の道具です。また、モルモン經が、それ自体イエス・キリストの福音について人々の敬意を集めるのは、見ていて驚くほどです。ちょうど、家造りらに捨てられたにもかかわらず隅のかしら石となったあの石のようです。（使徒4：11；詩篇118：22参照）かしら石であるモルモン經は、他の点では信仰深い大勢の家造りらによって、し

ばしば無頓着に拒否されてきました。しかし往々にして真理とはそのようなもので、賢い人の知恵は主の前に滅びます。（イザヤ29：14参照）そしてそのとき、確信と尊敬が、疑念にとって代わるのでです。

私はモルモン經がその正当性を証拠立てるものに不足していると思ったことはありません。この書物は読み手の心に、なるほどいろいろな疑問を起こすことでしょう。しかし私は、そうした疑問の行きつく答えによって、失望ではなく報いを得ています。答えが見つかれば確信がわき、確信できれば敬意が生じます。敬う気持ちを持てば、証への道も時には開かれます。

モルモン經を尊重し、また人々をもそのように助けることは大切なことです。モルモン經は神のみ言葉であり、この書物を持つ人々はこの書物によって裁かれます。ためになる教えや戒めや正しい知識を人に与える神聖な書物なのです。すべての人々が疑心を抱かずにモルモン經を受け、謙遜な祈りによってそれが真実だという聖霊の証を受け入れるのは理想です。しかし、そこまでいかなくとも、この書物が多くの人間に重んじられているのはすばらしいことです。

私はこの書物を尊重することで、自分が主に近づいたことを知りました。そのつながりが深くなつて、この貴重な記録に対する愛着や愛情が深まり、感謝しています。また、ありがたいことに、この書に対する崇敬の心が増すにつれ、私自身も成長しているのです。（ジョン・W・ウェルチ：弁護士、ブリガム・ヤング大学J・ルーベン・クラーク・ジュニア法医学大学院で教鞭をとっている）

さまざまな声



口パート・F・ボーン

あ れもこれもとあまりに忙しすぎて、
これでは一体どうすれば一生のうち
にしたいことがやりおおせるのかと、途方
に暮れることはないでしょうか。要求の声
は、愛し、尊敬している人たちから上がります。
彼らが勧める活動は、価値のある重
要なものなのです。ところがそれが問題で

す。私たちは何もかもできるものでしょ
うか。

こんな声を聞きます。

「教会の召しは決して断わってはなりま
せん。」

「女性もいろいろな活動に積極的に参加
するべきです。」

「仕事で成功しなさい。」
「良き隣人となりなさい。」
「政治活動や市民活動にも参加しなさい。」
しかしその一方でこういう声も聞きます。
「家族と一緒に時間をもっと取りましょう。」
「母親の務めは、女性にとって一番です。」
「もっと家庭で過ごしましょう。」
「教会の召しにもっと時間をさいてください。」

「極端なことは避けて、家族と教会に対する務めをいつも忘れないでいましょう。」

そこで問題です。家族に教会に仕事に社会に、あなたの時間をこちらへどうぞとさまざまな声が呼びかけるとき、熱心な末日聖徒はどうすればその時間を見つけられるのでしょうか。

季節があります

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」(伝道 3：1)この訓戒は昔と同様、現在にも当てはまります。現在のこと集中せず、過去や将来の生活を今に求めるのは良いことではありません。

いろいろな活動に費やす時間の割り合いは、その人が今人生のどの段階にいるかによってはっきり変わってきます。人生の各段階にはそれぞれ目的があって、一つ一つの季節を適当な時期に経験してこそ人生が充実するのです。

優先順位を決めること

ある特定の時期に、その状況の中で自分たちにとってどれが正しいことが判断するためには、優先順位を決めなければなりません。ところが、「家族と一緒にいましょう」

「教会の召しを果たしましょう」というように、どちらも「正しい」原則が衝突したらどうなるでしょうか。

大事なのは、その状況ごとに祈りながらよく考えることです。ある状況では正しいことが、事情が変われば通用しなくなるかもしれないことをよく承知していてください。優先順位をつけるときには、場合場合で最も大切なことを選んでいきます。たとえばむずかしい年齢の子供をかかえた親にとっては、教会の責任より子供との接触の方が大切ですし、ワード部の教会員に靈的な励ましが必要だというときには、息子とテレビで野球を観戦するよりそちらの方が優先されます。「家族と教会とどちらが大事ですか」という質問は、十把ひとからげの答えを期待しているとしたら間違っています。家族も教会も一番に重要で、どちらも神からきており、その時その時で優先順位は先にも後にもなるのです。両方ともイエス・キリストの福音という大きな広がりの中で欠かすことのできない要素となっているのです。個々の私たちに必要なのは、みたまによって生活することです。聖霊に敏感になれば、「季節」つまり状況ごとに、主に喜ばれ、受け入れられる優先順位が上手に決められると思います。

いつになつたら終わるのだろうか

私たちの時間を要求する声がさまざま聞こえる中で、意気消沈して「いつになつたら終わることやら」とつぶやいていれば好都合な場合もあるでしょう。要求の声はこの先いつまでも続きます。一方、それらの声に取り組むことこそ人生だと心得、その声から逃れることを考えずに現実を直視し、一日一日を楽しく生きようと考えるなら、

憂うつな状態は軽くもなります。

例えて考えてみましょう。自転車に乗るとき、足を使ってこいでいれば自転車は動き、バランスも取れています。しかし足を使わなければ自転車は止まり、乗っている人はバランスを失って倒れてしまいます。

問題に出会って気落ちして立ち止まるときもそれと同じです。じっとしたままいろいろな声が消えていくのをただ待っていたら、自分がみじめになりますし、将来の見通しはゆがんできます。動いて活動すれば、バランスは取れて見通しも立ち、充実した生活が保たれるのです。

調和を心がけましょう

調和の取れた生活をするためには、時間を作り振ることが必要です。聖歌隊の指揮者を例にとって考えてみましょう。合唱団ではアルト、ソプラノ、ベース、テナーをたくさんの人で歌います。それぞれがどんなに優秀な声楽家であっても、もしめいめいが人におかまいなしに好きな曲を勝手に歌つたら、音楽どころか騒音になってしまいます。合唱団は、正しい出番に適切な音量と表現で歌えるように指揮者が人を助けて初めてまとまります。指揮者は歌い手の個性をコントロールすることによって、調和の取れた美しいコーラスを生み出すのです。

家族、系図、ホームティーチング、伝道、福祉の責任、神殿活動、いろいろな集会、市民活動、隣人との付き合い、仕事……。生活の中のこうしたさまざまな「要求の声」についても同じことが言えます。どれも皆良いことだから好きな歌を好きな音量で歌ってよいと許すのではなく、私たち自身が自分の生活の指揮者になることを、主は望

んでおられるのです。主はヨセフ・スマスに、「そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり」(教義と聖約58:28)と言われました。結果が耳ざわりな不協和音になるか調和した音楽になるか、それは私たちが別々の声を適当な時と場所に適当な強さで投入できるかどうかで決まります。主からの靈感を得てバランスを取るのは私たちの責任です。最終的責任は、自由意志を使う私たちの肩にかかっているのです。

ひとつにまとめましょう

「あれもこれもとあまりに忙しすぎて、これでは一体どうすれば一生のうちにやりたいことがやりおおせるのか」という質問に対しては、たくさんの要求が正しい時と季節に従って生活に組み込まれるように、祈って主に尋ねながら優先順位をつけることが必要だと思います。そうすれば、できないと言っていつもイライラしているのではなく、できることを達成しながら喜んでいられます。「努めて書き業に従い」(教義と聖約52:27)、それによって心の弱るときを乗り越えながら、生活に調和を求めていくのです。私たちの生活がハーモニーの美しい讃美歌になるか、それともやかましい雑音になるかは、時間を要求するさまざまな声の出番や強さをどのように指揮するかにかかっています。この原則を個々の状況に応用すれば、ヨセフ・スマスの言う「私たちの存在の目的と意図」すなわち幸福(「予言者ヨセフ・スマスの教え」p.255を参照)を得ることができるのだと思います。(ロバート・F・ボーン: カリフォルニア州サンフランシスコのゴールデンゲート大学で教鞭をとっている)

「シンディーに」

シンシア・ブラウン・スチーブンス

母 が急死したとき、私は二十歳で、家から5千キロほど離れた町の大学に通っていました。2年の間母に会わないでいたためもあって、突然の死は大きなショックでした。

それから2カ月後、宣教師が家にやってきました。話を聞いていると、母の信条の多くがこの教会の考え方と一致しているのに驚きました。母は自分の教会から非難されながら、信念を曲げずにきたのです。私はすぐにこの福音の教えを受け入れ、3週間後にバプテスマを受けました。

私にとって、バプテスマはつらくもうれしくもありました。それまで経験したことのない幸せな気持ちを感じた一方で、母がこんなに真理に近づいていながらたった2カ月の差でこの福音を聞くことができなかつたという事実が悲しく、また残念でならなかつたのです。永遠の生命についていくら知ったところで、心の平安は見いだせません。私は心の内を祈り、母の死を受け入れられない自分の弱さをわびました。

そうしたある晩、私は美しい夢を見ました。母が私の部屋に入ってきて、ベッドの端に腰をかけるのです。白くめの服を着て、見たところは死ぬ前に最後に会ったときと同じ母なのですが、ずっと若々しくて、顔には苦勞や悲しみのしわが全然ないので。輝くようなほほえみをたたえていまし

た。目がさめたとき、覚えていたのは、夢の中でしばらくの間、母が大丈夫よと私を慰め、励ましてくれたことだけでした。

その翌週のことです。ひとつ荷物が郵便で届きました。それは母がしまっておいたもので、「シンディーに」と母の筆跡であて名が書かれていました。私は驚きましたが、とにかく中をあらためました。古い家族の写真が何枚か入っていました。私が生まれる前に亡くなった祖父母の写真でした。私の学校の答案用紙や子供のときの写真、サンタクロースにあてた初めての手紙もありました。母が取っておいた小さな白い日記帳、手紙、そして黄ばんですり切れた大判のグラフ用紙がありました。そこには、母のまた母親がずいぶん前に始めて、母も丁寧に書き継いでいた数世代分の家系図が載っていました。

私の目には涙があふれました。長い時間、その古い箱に頭をもたせかけて泣いていたと思います。すすり泣きの声が疑いや悲しみを洗い流してくれて、それまで願い求めていた平安が体中にしみとおっていきました。

その平安とともに、はっと気がつきました。母の信条が教会のいろいろな教えと一致していたのも、家族の品物を箱に集めて取っておいたのも、偶然ではない。母の一生と母の教えが、私に完き福音を受け入れる用意をさせたのです。母は信仰と靈感によって、私に家族の歴史をまとめ、家族を永遠に結ぶための系図や神殿活動をする道を備えてくれたのです。

私は母の宣教師になる必要はありませんでした。母が私の宣教師だったのです。(シンシア・ブラウン・スチーブンス：3児の母、ユタ・サンセットステーキ部サンセット第3ワード部所属)



「知恵の言葉は守っていらっしゃるということですが。」

「その通りです。」

「では、この律法に従う人に約束されている祝福は受けておいでですか。」

「はい。いろいろとなすべきことを行なう健康も体力も祝福していただいている。」

「それとまったく同じことです。おふたりで幸せな結婚生活を築く基となる律法に従えば、主は幸せな結婚を祝福してくださいます。」私はそう話しました。

それからその律法とはどういうものかと尋ねられたので、私は教義と聖約の121章を開きました。主はそこで、正しい指導の方法を教えておられます。(特に34-46節)またローマ人への手紙の12章では、パウロが教会の各ユニットにあって一致をはかるための律法を語っています。

そのご夫婦は、教義と聖約121章に「ただ説服と堅忍と柔軟と温情と偽らざる愛^{いつわ}……また、親切と淨き知識^{きよ}……偽善にあらず奸智^{かんち}にあらず」(42章)と教えられているにもかかわらず、徳をもって協力して指導者の務めを果たすことをしなかったと率直に認めました。彼らはどちらが良くてどちらが悪いか、いつもお互に張り合って、家庭を土俵に手段を尽くし勝ち負けを争っていたのでした。

彼らはローマ人への手紙12章のパウロの訓戒に反して、お互に「この世と妥協し」(2節)た期待を持ち、「思うべき限度を越えて」(3節)自分のことや自分の意見に執着し、ふたりの相違を良い方に受けとめず(4-6節)、「互に尊敬し合い」善意と愛と快活さと兄弟の愛をもつていつくしみ合

う家庭に欠けていたこと(8-10節)を知りました。伴侶が喜ぶときに喜び、泣くときに泣く(15節)ことを常にはせず、「互に思うことをひとつに」(16節)することが少なく、互に「和平に過ご」(18節)す努力が足りなかったのでした。ふたりは、「自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せせる」(19節)ことがわからず、「悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい」(21節)という教えが身についていなかつたと語りました。

つまり私は、彼らに対して次のことを述べたわけです。ある意味でそうした状態は「はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている」人々と同じで、「そもそもしなければならないが、これも見のがしてはならない」(マタイ23:23)ということです。

この質問の答えとしては、人生の一側面としての結婚を支配する数々の律法に従ったならば、実り豊かな永遠の日の光栄の結婚が約束されると申し上げておきます。その律法は福音全体の中でも最も守りがいのある高度な律法であり、従う人々に主が約束しておられる恵みは、ほかのどの恵みよりも大きいのです。

「およそ最高の栄に進むを得て生命をつくるに至る門は狭く、道は細くしてこれを見出す者は少し。……されど、もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば、汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん、すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。」(教義と聖約132:22-23)

神権の祝福

エリナー・イエイツ・バートン

神 権の祝福が私の生活に大きな意味を持ったのは、何と言っても3年前に夫のデイブが重病で入院したときからだと

思います。検査をすると、手術のできない大きな癌がんが見つかりました。医師たちは、近代医学では数年の延命が可能であるし、完治する人もいると説明してくださいました。私たちは、夫もその幸運な人の仲間入りができると信じて、希望を持ちました。



胸に激痛を感じ始めたのは、順調に回復していたときです。肺炎を起こして、両肺に血の固まりができたのです。その後の3週間は肺の機能を回復させ、生命を救うのに精いっぱいで、癌のことなど二の次でした。最後に胸の大手術を受けて、ようやく再び回復に向かうようになりました。

私たちは安堵^{あんど}に胸をなで下ろしました。私にとって難題は一度にひとつで十分だったのです。さて落ち着くと、また癌のことが気になり始めました。私は樂観的な気持ちで、医師に夫のこの先の見込みについて尋ねました。医師は、科学療法がきけば2年位は癌の転移が遅れるでしょうと言いました。私はぼう然としました。15年か20年という返事を期待していたのに、2年ももてば良い方だというのです。

私は悲しみに打ちのめされました。それは、夫が死んだとしてもこれほどではないと思われるくらいで、3日3晩の間、苦しみのあまり自分が死んでしまいそうな気持ちでした。日曜日になって夕方の聖餐会に出席すると、監督やホームティーチャーなど何人かの人が、何か手伝えることはないか尋ねてくださいました。私には神権の祝福がぜひとも必要でしたが、口を開けば取り乱してしまいそうのが怖くて、ただ心配ありませんというようにうなずいただけで建物から出ました。

それから数分後に病院に向かう途中、私は援助を断わった自分に腹を立てていました。こんな状態ではもうとてもいられないと自分でわかりました。「これからどうしたらいいの。」そのときふいに答えが浮かびました。「ディープは神権を持っている。私はディープから祝福をしてもらえるんだわ。」

夫が祝福を与えるのは少しおかしな感じ

もしました。自分の命を救ってもらうために何度か祝福を受けた側だったのですから。「病人」に「健康な人間」への祝福を頼むようなものでした。でも、私にとってはほかに頼める人はいませんでした。

その日の夜、私が夫のベッドに腰かけ、夫が私の前に立ったときの様子は忘れることができません。病衣を着た夫はやせこけ、青ざめ、痛みをこらえながらやっとのことで立ち、おもむろに左手を私の肩、右手を頭に置いて神権の祝福を述べ始めました。

義人の行使する神の神権の力強いこと！夫は力と勢いと権威をもって語り、私の心から悲しみが除かれるように主に願いました。すると即座に苦痛がいやされるのを感じました。それはまるで主が直接に心の中から悲しみを取り出してくださったようでした。

それ以後、大変な日々があっても私に苦悩は訪れませんでした。

ここ3年間、夫の癌との闘いは苦しく辛いものでしたが、夫はまだ生きています。医師は、完治も大いにチャンスがあると言っておられます。私たちは、夫が今生きていられるのは神権の力のおかげであると確信しています。

讃美歌にある通り、「天のいやし得ぬ悲しみは地上にない」ことを、私は心の底から知りました。(『来たれ、悲しむ者』英文讃美歌18番参照)

私はこれまで神権によって受けてきた祝福を毎日天父に感謝しておりますが、一番心に残るのはやはり、病衣を着た勇気ある神権者のもとで部屋中に力がみなぎったあの晩のことです。(エリナー・イエイツ・バートン：6児の母、ユタ・ベニオンステーキ部ペニオンワード部所属)

マシューから 贈られた テキスト

デニーズ・ウォルシュ・ノートン

7歳のマシューが一生懸命働いて得たお金で、土曜日に母親のために扶助協会のテキストを買いました。その行為が、どんなに意味深いものであったか、おそらく本人にはわからなかつたと思います。そのお金は、父親が病気で入院中にマシューが家の仕事を手伝い、「一家の柱」として大役を果たした特別報酬だったのです。親としては、自分のために年相応のおもちゃでも買ってもらひたかったのですが、マシューはかえって、私のために新しい本を買うことにしたのです。

私は、マシューの犠牲を受け入れるのが心苦しくて、2、3日後に自分の気持ちを友人に打ち開けました。結局のところ、自分の什分の一を払い、本を買ったのでは、マシューの手元には、ほんのわずかなお金しか残らなかつたのです。

「マシューのお金ですもの、受け取るまでもなかつたのよ、ナンシー。でも私が受け取れば、マシューは喜ぶと思ったの。私も彼のしてくれたことがうれしかつたし、彼には別な形で返してあげるつもりよ。」そう説明しました。

そのとき、奇跡が起つたのです。

言い終わつた瞬間、什分の一に対する私の思いが一変しました。さながら突然明か

りがついたときのように、私の理解力はいきなり開かれたのです。

私はいつも定期的に忠実に什分の一を納めてきました。しかし、ふり返つてみると、ご自分の什分の一を要求なさる神（教義と聖約64：23参照）に畏れかしこみながら什分の一を捧げていたのです。とにかく私がひどく思い違いをしていた神は、慈悲深く、愛情があつて、私たちが朝な夕なに心をうちあける祈りに耳を傾けてくださる御父、私たちを心にかけ、みもとにたち帰ることを望んでおられる父なる神ではなく、おずおずと什分の一を捧げる対象としての神でした。

私はそのときに、天父が私を愛しておられるることを知りました。たしかに収入の什分の一を天父にお返しするのは、私の当然の義務でしたが、むしろ天父は、私の捧げ物を認め、私がそのようにすることを喜ばれたのでした。

私は台所に立ちつくしたまま、涙がほおをつたつて流れしていくのを感じていました。自分の口をついて出たことばが、心に響きわたるのを感じながら、主の約束を思い起こしていました。

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」（マラキ3：10）

愛にあふれる天父の教えに、どんなに感謝していることでしょう。そして、幼い息子の思いやりにあふれた、無私の行ないにも、感謝せざるにはいられません。（デニーズ・ウォルシュ・ノートン：カナダ、アルバータ州リービットに在住）

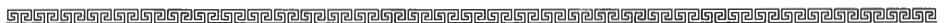
ペルーに残る 白い神の伝説

カーグ・マグルビー

西 半球のインディアン部族のほとんどに、昔天から下って民を教え、組織した「白い神」にまつわる言い伝えが残されていることは、よく知られています。広い地域にわたるこの言い伝えの聞き書きのうち最も興味深い話のいくつかが、ペルーのもので、ペルーではこの伝説の神は、コンチキ、ビラコチャ、タナバ、パチャカマク、タラパカ、アルノアンなど、その土地でさまざまに呼ばれています。ペルーハ人歴史家の有名な4人、つまりペドロ・チエザ・デ・レオン、サルミエント・デ・ガンボア、ベタンゾ、サンタクルス・パチャクチは、ひげをたくわえたその白い神につ

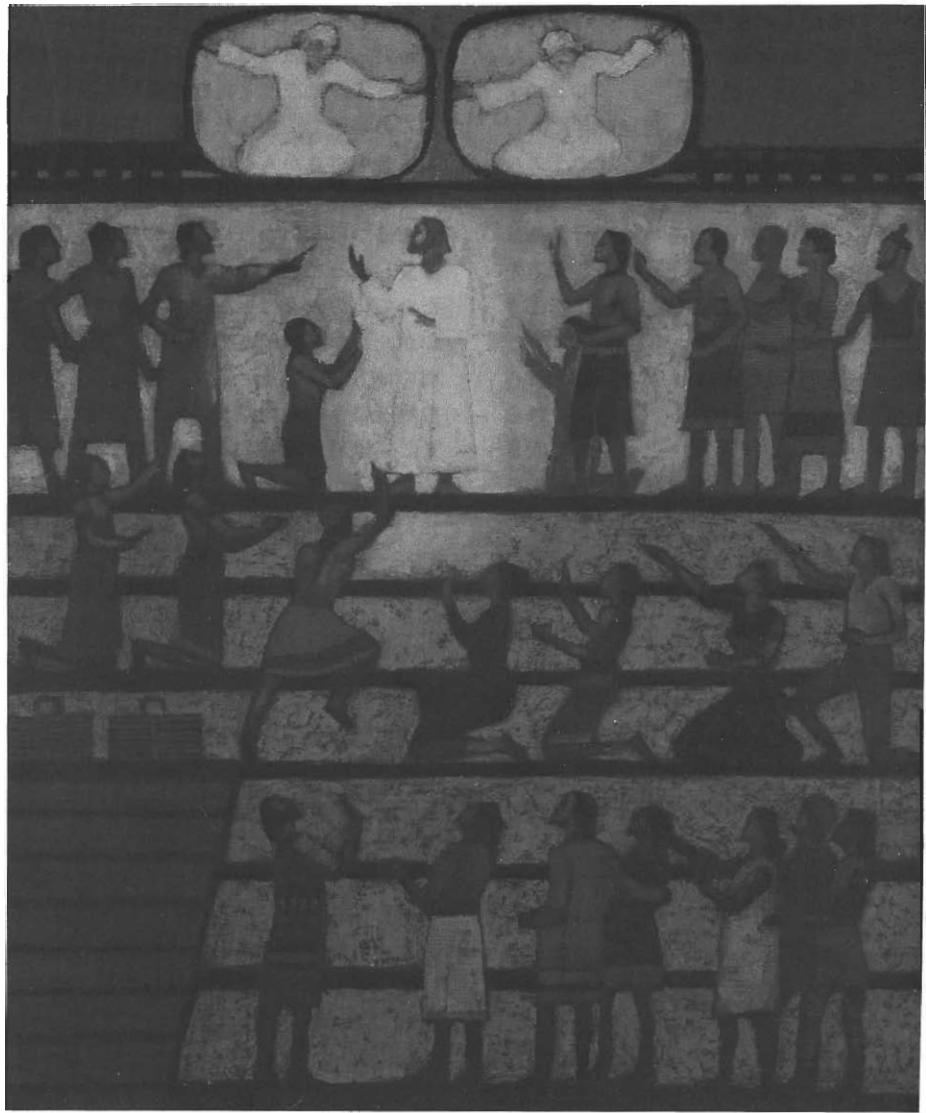
いて特に興味ある記述をしており、それらを総合すると、伝説の神の姿や個性、それにアンデス山地インディアンの祖先の間でその神のしたことがかなり詳細に浮かび上がります。

ペドロ・チエザ・デ・レオンは、スペイン人支配者間の内戦にまで発展していた反乱鎮圧の派兵に1兵卒として加わり、1548年、ペルーに上陸しました。1550年までの滞在期間に、彼は征服間もないこの地方のほとんどの国を訪れ、地勢、植物、住民の習慣や主だった歴史を観察し、記録しました。1541年のコロンビアへの旅行以来、観察日誌をつけていましたが、このときはペ



ルーとペルー人の歴史を書きとめることにしたのです。彼は除隊になってから、アモータスとオレイホネスというインカ貴族の

古老や現地に通じたスペイン人に取材し、滅びたインカ帝国の歴史や伝統について知り得る限りのことを見聞き出しました。



ゲーリー・スミス画

●ペルーに残る白い神の伝説

ペドロ・チェザ・デ・レオンは最初の1冊の前書きにこう書いています。「私がここに書くことは事実であり、有益かつ重要な事柄である。なぜならば、他の兵士たちが眠っている間も真夜中になってきたびれ果てるまで書き続ける日が幾晩もあったのだから。」 チェザの1冊の本「ラ・クロニカ・デル・ペルー（ペルー史）」は1553年にセビリヤで出版されました、その次の「エルセニヨーリオ・デ・ロス・インカス（インカの帝王）」は1880年によく刊行されました。彼は「インカの帝王」の第5章で先祖たちに姿を現わした白い神の伝説をこう記録しています。

「インカに王が出る前、あるいはこれらの王国でインカの名が聞かれる前、これらインディアンは語る中でもとりたてて大きなひとつのことについて話すのだが、彼らは力を込めて言う、長い間太陽を見なかった、と。そして民は太陽がなかったため恐れおののき、神とあがめる人々に長い祈りや嘆願を捧げて、失った光を戻してくれるよう願った。そうしていると、チチカカの島、これはコューの大きな湖の中にあるが、そこから太陽がきらきらと昇って、皆はたいそううれしくなった。そしてその後、彼らは言う、昼の太陽の地から大きな白い男が現われた。その顔つきや姿かたちは大きな権威と尊厳を^{もつ}見え、そしてこの男は絶大な力をもって山を平らにし、平野を高い山にし、石から水をわかせた。人々はその力を認めて、その男は万物の創造者、自分たちの創始者、太陽の父と呼んだ。なぜならばたとえそれでなくとも、彼らは言う、男は多くのもっとすばらしいことをした、

人間と動物に命を捧げたから。そして人々は男の手から大きな恩を受けた。私に話してくれたインディアンによれば、彼らはそれを先祖から聞き、先祖はそれを昔から伝わる歌の中で聞いたという。この男は北へ向かい、山を旅しながら多くの奇跡を行なって、人々は二度と再び男を見なかった。多くの場所で、彼らは言う、男はどのように生きるべきか人々に戒めを与え、愛と深い謙遜さをもって語り、善人になるよう、人を傷つけないように、代わりにお互い同志愛し合って慈悲深くなるようにと説いた。たいていの人々は男をチキビラコチャと呼ぶが、コユーの地方でチュアパカと呼び、別の方ではアルノアンと言う。いろいろな場所に多くの神殿が男のために建てられ、そこでは男に似せて石像を立て、その前にいけにえを捧げた。チアフアナクの町にあるいくつもの大きな石像はこの時代に築かれたものと言われ、昔からの言い伝えによっても、インディアンたちは私がチキビラコチャについて語る話と同じ話を物語ったという。その男についてそれ以外のことは何も言われておらず、また、その男はこの帝国に再び戻ってることはなかった。」

ペドロ・サルミエント・デ・ガンボアは、スペイン軍有数の船長兼航海長でした。彼はクスコに駐屯していたときに、フランシスコ・デ・トレド総督からインカ史の編纂を命じられました。古代インカの帝都にお健在の長老たちを召集し、個別に話を聞いて、その証言を比較検討してから結論を出し、まとめたのですが、彼がそろえた稿本は、「ヒストリア・デ・ロス・インカス、ラ・セガンダ・パルテ・デ・ラ・ヒストリ



ア・ラマダ・インディカ（インカ史—インディアン史の第2部）と題され、2冊目は3つに分冊される予定になっていました。草稿は長い間スペインに保管され眠ったままでしたが、やがてゲッティンゲン大学図書館（ドイツ）に売られ、そこで見いだされて1906年に出版されました。サルミエントの語った白い神の伝説は次の通りです。

「インディアンの全員が一致して、自分たちはこのビラコチャによって造られたと述べた。ビラコチャとは彼らの信じるところによれば、中背の白人で、身のまわりに白い衣をまとい、杖を持ち、手に1冊の本を携えていた。このあとでインディアンは奇妙な話をした。それは、こういうことである。このビラコチャは人民の全部を造ったのち、大勢の人間が集まっている所へ歩いてやってきた。ビラコチャは敬虔な業を行ない、造った人々を教えながら旅を続けた。そして、ペルーの地を離れるについては、自分の造った人々に話をし、将来の出来事について民に忠告した。自分がビラコチャだ、お前たちの創造者だと主張する人がやってくるが、民はペテン師にだまされてはならない。これからは使いたちを送って民を教え、支えようと。こう言ってから、ビラコチャとふたりの連れは海に入り、まるで地面の上を歩くように沈まないで、水の上を歩いて行った。」

ジュアン・デ・ペタンゾは、フランシスコ・ピサロらと共にペルーを侵略した最初の征服者でした。彼はこの国に踏み込んでからただちにインカ語のケチュワ語を勉強し始め、宫廷公式通訳官に召されるほど上達しました。土地の言語に堪能であったため

め、1冊目の出版物はスペイン語—ケチュワ語辞典でした。インカの王女のひとりと結婚してクスコに住み、じかに観察し、資料を集めて、1551年、アンデス・インディアンの伝統と歴史についての主著である「サマ・イ・ナラシオン・デ・ロス・インカス（インカ略史）」を出しました。彼は自分の書に「現住民の語りの順序」をそのまま残そうと配慮しました。以下はペタンゾによるビラコチャの神の描写です。

「インディアンに、古代人がこのビラコチャを見たときビラコチャをどのように思ったかを尋ねると、受け継いできた言い伝えによって、彼らは私に言った。ビラコチャは背の高い人で、くるぶしまでくる白い衣服を着ており、この衣をビラコチャは腰のところで締め、髪の毛は短く、頭に祭司がかぶるような冠をつけ、かぶり物なしで歩き、手には今祭司たちが持ち歩く大きな宗教書のように見えるものを持っていた。私が彼らに石像を建立してあがめたこの方の名前を聞くと、彼らは、コン・チキ・ビラコチャ・パチャヤチャチク、つまり彼らの言語で言えば『神、地球の創造者』というと私に言った。」

次の伝説の記録者については、現在のところ、インカ帝国の南部出身のインディアンで、キリスト教に改宗したことを誇りに思っていたということ以外、ほとんど知られていません。彼はドン・ジュアン・デ・サンタクルス・パチャクチ・ヤンキという長い名前を使って書き、スペイン語とケチュワ語の混じったその風変わりな原稿は、1880年まで出版を見ませんでした。しかし、このサンタクルス・パチャクチの白い神伝



ア・ラマダ・インディカ（インカ史—インディアン史の第2部）と題され、2冊目は3つに分冊される予定になっていました。草稿は長い間スペインに保管され眠ったままでしたが、やがてゲッティンゲン大学図書館（ドイツ）に売られ、そこで見いだされて1906年に出版されました。サルミエントの語った白い神の伝説は次の通りです。

「インディアンの全員が一致して、自分たちはこのビラコチャによって造られたと述べた。ビラコチャとは彼らの信じるところによれば、中背の白人で、身のまわりに白い衣をまとい、杖を持ち、手に1冊の本を携えていた。このあとでインディアンは奇妙な話をした。それは、こういうことである。このビラコチャは人民の全部を造ったのち、大勢の人間が集まっている所へ歩いてやってきた。ビラコチャは敬虔な業を行ない、造った人々を教えながら旅を続けた。そして、ペルーの地を離れるについては、自分の造った人々に話をし、将来の出来事について民に忠告した。自分がビラコチャだ、お前たちの創造者だと主張する人がやってくるが、民はペテン師にだまされてはならない。これからは使いたちを送って民を教え、支えようと。こう言ってから、ビラコチャとふたりの連れは海に入り、まるで地面の上を歩くように沈まないで、水の上を歩いて行った。」

ジュアン・デ・ペタンゾは、フランシスコ・ピサロらと共にペルーを侵略した最初の征服者でした。彼はこの国に踏み込んでからただちにインカ語のケチュワ語を勉強し始め、宫廷公式通訳官に召されるほど上達しました。土地の言語に堪能であったため

め、1冊目の出版物はスペイン語—ケチュワ語辞典でした。インカの王女のひとりと結婚してクスコに住み、じかに観察し、資料を集めて、1551年、アンデス・インディアンの伝統と歴史についての主著である「サマ・イ・ナラシオン・デ・ロス・インカス（インカ略史）」を出しました。彼は自分の書に「現住民の語りの順序」をそのまま残そうと配慮しました。以下はペタンゾによるビラコチャの神の描写です。

「インディアンに、古代人がこのビラコチャを見たときビラコチャをどのように思ったかを尋ねると、受け継いできた言い伝えによって、彼らは私に言った。ビラコチャは背の高い人で、くるぶしまでくる白い衣服を着ており、この衣をビラコチャは腰のところで締め、髪の毛は短く、頭に祭司がかぶるような冠をつけ、かぶり物なしで歩き、手には今祭司たちが持ち歩く大きな宗教書のように見えるものを持っていた。私が彼らに石像を建立してあがめたこの方の名前を聞くと、彼らは、コン・チキ・ビラコチャ・パチャヤチャチク、つまり彼らの言語で言えば『神、地球の創造者』というと私に言った。」

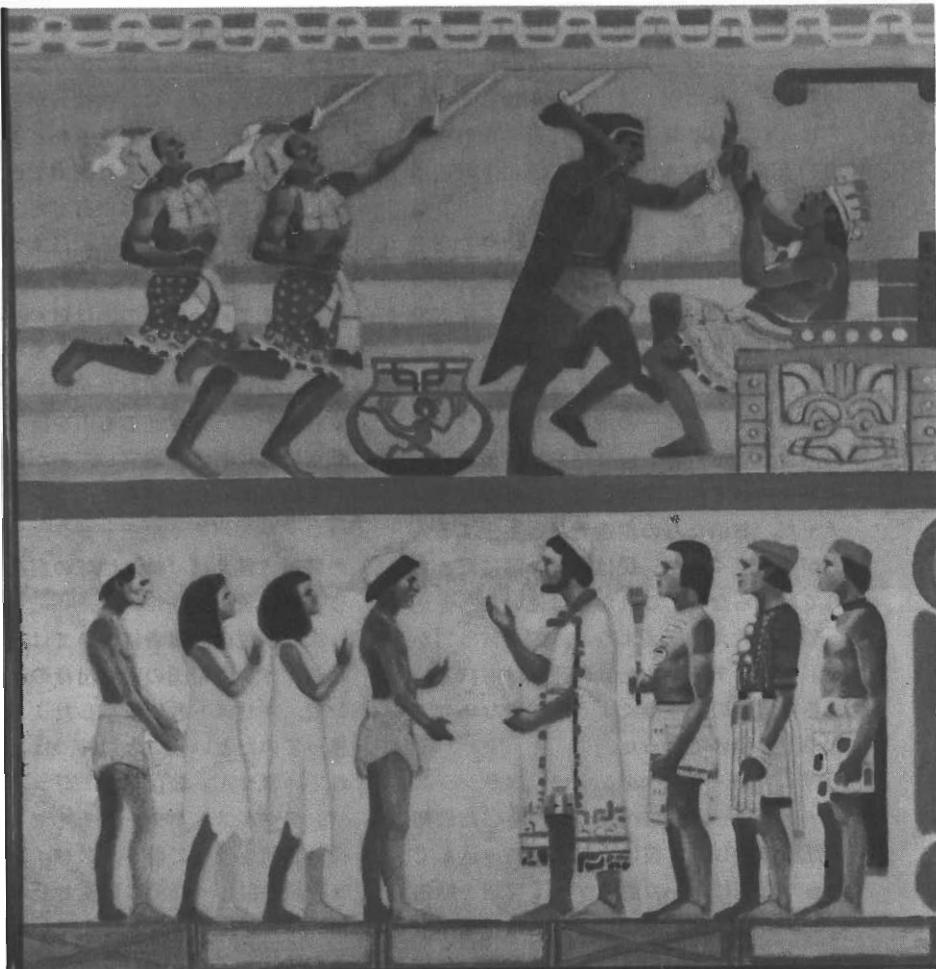
次の伝説の記録者については、現在のところ、インカ帝国の南部出身のインディアンで、キリスト教に改宗したことを誇りに思っていたということ以外、ほとんど知られていません。彼はドン・ジュアン・デ・サンタクルス・パチャクチ・ヤンキという長い名前を使って書き、スペイン語とケチュワ語の混じったその風変わりな原稿は、1880年まで出版を見ませんでした。しかし、このサンタクルス・パチャクチの白い神伝

●ペルーに残る白い神の伝説

説は、最も興味深いものです。

「悪魔がこの地から追い払われて何年かしてから、タバンチンスヨのこれらの王国、諸地方に中肉中背のひげを生やした男が、かなり長いチュニックを着てやって來た。人々は彼が若者よりも年をとっていたと言う。彼は白い髪の毛で、すらっとしていて、

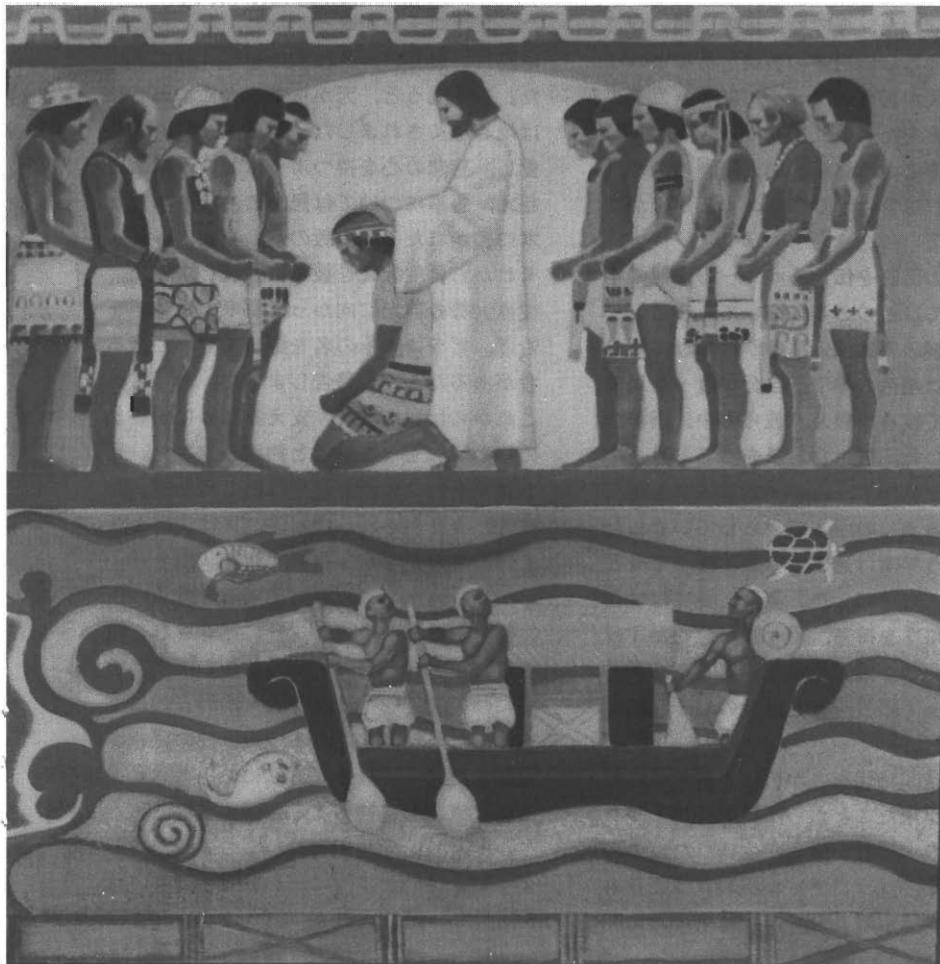
杖を突いて歩き、そして民を皆息子、娘と呼んで大きな愛をもって人々を教えた。ところが、民の皆がいつでも話を聞いて従つたわけではなかった。彼はこの地方を旅したときに目に見える奇跡をたくさん行なった。人々に手で触れて病人を治した。彼は持ち物を持たず、動物の群れも持たなかっ





た。この男は、民が言うには、地方の言葉をどれも土地の者より上手に話し、民は彼をトナバあるいはタラパカ・ビラコチャンバ・チャヤキチャチャンあるいはパクチャカンまたはビクチャイカマヨク・カナカイカマヨクと呼んだ。彼はアポタンボ（宿屋あるいは下宿屋）のそばで大きな愛をもって

民をこらしめ、民はうっとりと彼の話を聞き、彼の手から木の枝を受けた。木の枝の中に彼が民に語った説教の1章1章が強調してあった。トナバというこの男は、民が言うに、コラスヨスのあらゆる地方をめぐり、精力的に説教をした。このトナバは、民が言うにある町を水に沈むように呪った。



ゲリー・スミス画

●ペルーに残る白い神の伝説

今それはヤンキ・カパコチャの湖と呼ばれ、どのインディアンもそれは昔は大きな町だったと言う。それが今は湖だ。民が言うもうひとつのこととは、カチャップカラと呼ばれた高い丘の頂上に女の形をした偶像があつて、彼らが言うに、トナバはこの偶像をきらい、あとで火を呼んでこの丘と偶像を焼き、丘をまるでろうでできているように溶かして滅ぼした。今でも、世界に聞いたことのない恐ろしい奇跡の名残があるということだ。民が言うにチュナバはチャカマルカ川のわきをたどって旅を続け、やがて海に出て、そこから海峡を越えて別の海に行つた。これは昔むかしのインカ族が確かだと証言している。」

白い神の伝説を伝えるペルーの4冊の本を総合してひとつの姿に描いてみると、ビラコチャ神の興味深い横顔が浮かびあがります。彼は創造の神で、自分が造った民の所を訪れて彼らを教え、彼らの中に指導者を立てました。彼は白い肌をしており、中背か大柄な体格で、白いチュニックを腰で締めてくるぶしの所までたらしていました。若いという年頃は過ぎていて、ほっそりとしており、白髪でした。歩くときには杖を携え、手に本を持ち、時々頭に冠をかぶりました。非常な権威を示しましたが、愛と謙遜をもって語り、皆を自分の息子、娘と呼びました。

インカ帝国時代をさかのぼる昔、このビラコチャが来たことから、アンデス・インディアン最大の言い伝えが生まれたものと思われます。ビラコチャが現われる何日も前から、太陽は暗くなり、民はそのため非

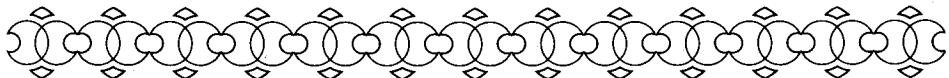
常な辛苦を味わいました。熱烈な祈りや嘆願ののちにようやく光が戻り、それからビラコチャが現されました。彼はペルーの山間の行く先々で奇跡を行ないました。丘を低くし、平地を山にし、岩から水をわかせ、動物や人間を生かし、水上を歩きました。手を触れるだけで病人をいやし、さまざまな土地の言葉をどれも流ちょうに話しました。ビラコチャが呪ったため、ひとつの町は湖におおわれ、全住人はおぼれ死にました。丘を呪うと、天から下る火によって丘は焼き尽くされました。彼は人々に隣人を愛し、慈悲の心を持つようにという戒めを与え、悪事については民をこらしめました。木に書かれたその説教の写しを民に与え、それから再度教えを彼らに強調しました。彼は大勢の群衆に向かって将来の出来事を告げ、ビラコチャの名を語ってやって来る者があるだろうと警告しました。そして、これからは民を教え、支えるためにまことの使いやしもべを送ると約束しました。ビラコチャはこの世の財産は何も持たず、訪問を終えてから海へ向かい、民は二度と話を聞くことがなかったのでした。

アメリカ土着の民族に伝わる数多くの白い神の伝説と、モルモン經に記録された復活したキリストのアメリカ訪問の記事との間に強い関連を主張する人々がいるのもっともなことです。ペルーの伝説の詳細が主張を裏付けています。私にも、スペイン人歴史家たちに初めてその伝説を物語ったペルー・インディアンは、この話をかなりよく覚えていたように思われるのです。

委任するとき, しないとき

☆ 家庭と教会のためのある提案
ウイリアム・G・ダイヤー





指 導の原則のうちで委任ほど誤解されているものはないのではないかと思います。仕事で大忙しの指導者に対して、「もっと委任しなくちゃだめだよ」とか「委任の仕方を知らないんだね」といった言葉をよく耳にします。委任といえば仕事を別の人にはそっくりあづけてその責任から手を引いてしまうことだと考えているのでしょうか。

しかし、立派な指導者であれば、委任したからといって、必ずしも時間が急に増えるわけではないことを知っています。長期的に見て、上手な委任ができればほかのことをする時間が生まれるはずですが、さしあたっては指導者にもっと時間が要求されることもあるのです。

何が必要なのか

委任を、收拾のつかない重荷ではなく自分の手のうちの道具にするには、どうしたらよいでしょうか。最初に大切なのは、委任しようとしている仕事の性質を理解することです。

1. 割り当て 割り当てとは、たいていはその時1回限りのはっきりした具体的な仕事を言います。話をする、レッスンの一部を行なう、お使いに行く、などがそうです。我が家のある16歳の息子がバスケットボールの早朝練習に出かけるのを車で送らなければならないとき、私は年上の子に運転

を頼んだのですが、これは割り当てです。その日1日だけ、私の代わりにしてくれた仕事ということになります。

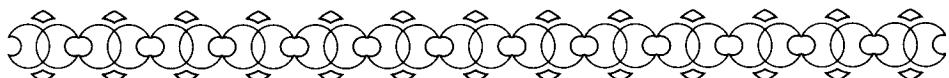
割り当ては1回限りの仕事なので、新しい技能を伸ばすなどということはあまり期待できません。しかし、割り当てがきっかけとなって新たな関心や訓練、進歩につながることはあるでしょう。

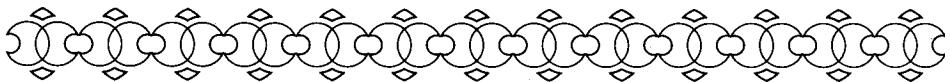
2. プロジェクト プロジェクトとは、もっと大がかりで複雑ないくつもの仕事が組み合わさったもので、能力や技術が要求されます。しかし割り当てと同様に、たいていは一時的な仕事です。

たとえば、私のワード部の監督が大祭司グループリーダーに、ワード部夕食会のプロジェクトを委任しました。それには、食事、テーブル、装飾、給仕、余興などの準備が全部含まれていました。それを受けたグループリーダーは、おののの責任をひとつずつ数名に割り当てるのです。

両親は、適当な場合には、プロジェクトの責任を子供たちに与えるとよいと思います。「ふとんを上げなさい」「これをお隣に持って行って」「コートをきちんとしまいなさい」「ごみバケツを出して」「茶わんやお皿を並べて」などという小さな割り当てではなく、家庭の夕べの活動や食料品の買物、1週間分の献立作り、貯蔵食料の確認などを子供に委任するのです。

上手に委任された計画は、その責任を受





けた人たちにとってすばらしい成長の機会となるはずです。計画全部を任せてしまうのをためらって、ただ割り当てしか与えなのは、愚かな人です。

3. 担当 担当というのは、その時限りの割り当てやプロジェクトと違って、長期間続く込みいいた活動をいいます。

それは役職とか召しとかの決まった働きである場合があります。ステーキ部長は福祉農場の仕事をある高等評議員に、独身成人のプログラムを別のある人に、また若い男性や若い女性、教師養成、スポーツ活動その他の責任をそれぞれの人に委任します。

しかしまた、正式の召しや役職といった形を取らず、必要が生じたときに委任することもあります。ある父親が、家族の車をいつも点検する責任を長男に担当してもらうようにしました。十代の娘は、毎朝聖典の読書と祈りをするように家族全員を起こす仕事を受け持っています。持ち場を決めて子供たちに掃除の責任を与えている家庭もあります。

ある母親は買物の計画を娘に委任しました。かなりの大金を娘があずかって、献立とにらみ合わせ食料品一切の買物をする責任です。担当を委任すると、委任された人には学んで成長する機会があり、指導者や親は仕事がひとつ減ります。しかし初めに教えたり養成したりするのに、仕事を自分でする場合よりももっと時間がかかること

があるのも事実です。

なぜ委任を

指導者が委任することには、おもな理由がふたつあります。(1) その仕事をする時間、技能、あるいは手段などに不足している。(2) その責任や活動によってもたらされる成長の機会をだれか別の人に入れたいと思う。

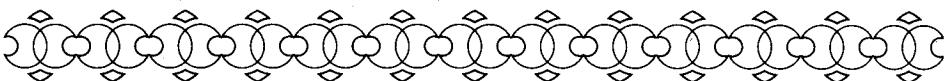
他方、委任をしない指導者たちの理由としては、(1) 委任しても、望む通りの仕事が必ずしも期待できない。(2) 教えるよりも自分でした方が時間がかかる。(3) 何かを委任しても期限内に「適切な」やり方で仕事が終わらないのは、見ていてイライラする。(4) 割り当てられたことについて質問や不満が出るため、かえって問題が増え、時間が取られることがある、などがあります。

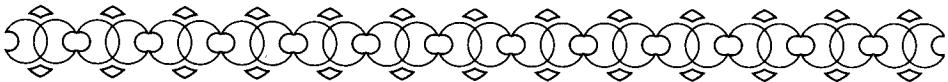
障害を取り除きましょう

しかし、委任する際の邪魔物は克服できます。次に提案をあげますので役立ててください。

1. 靈感を求める 個々の割り当てをだれに与え、どういう人たちにどの仕事をしてもらうかを祈って決めます。そうすればあなたも委任を受けた人も、仕事に対する意気込みが違ってきます。

2. やりがいのある仕事を与える 退





屈で面倒くさい活動だけを人に押しつけ、良い仕事は自分でするという傾向はありませんか。そうすると、仕事を与えられた人はそこに進歩や成長が見いだせず、やがて仕事を嫌うようになります。ひとりの子だけが家庭のタベの後の皿洗いをいつもさせられて、レッスンをしたり活動を選んだり、デザートを決めたりする役目がまわってこないとしたら、いやになるのは当然です。教会や家庭の指導者は定期的に委任したことを見直して、人々が自分の責任をどう感じているかを知ってほしいと思います。

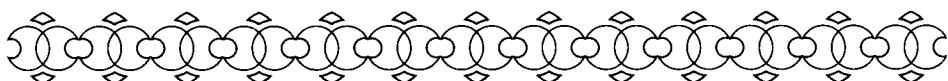
3. こちらの期待していることははつきり伝える 仕事を人に委任しても、ある程度の責任はまだその人に残っています。買物の計画を娘に委任したとして、もし娘が下手な買物をしてしまった場合、家族の食事や栄養状態についての責任はそれでも母親にあるわけです。母親が、買物の大切さ、使うお金の額、いつ買物に行ったらよいか、どのような品質の物を選んだらよいかなど、自分の期待していることははつきり説明することが大事です。それがしっかりと伝わらないと、娘はそのつもりでないのに母親や家庭の計画をだいなしにしてしまうかもしれません。

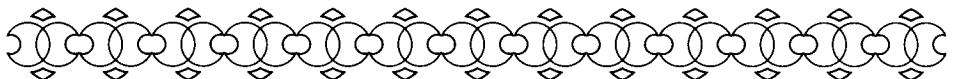
4. 意欲を持たせる 仕事の重要さを説明し、目標をはっきりさせたら、今度はその人に割り当てやプロジェクトや担当を任せます。新しい割り当てに対して意欲

がわくようにただ励ますだけよりも、言葉で気持ちや感想を尋ねた方が得るところが多く、それはまた、質問を引き出し、あいまいな点をはっきりさせ、最後まで責任を果たすことにもつながっていきます。

5. 必要に応じて指導する 責任が、受けた人にとってなじみのない分野であるためにすぐには上手にできないことがよくあります。こちらで望むような仕事をしてもらうためには、指導者が時間を取って適切な指導と訓練を行なうことが必要なこともあるでしょう。たとえば、神権者にホームティーチングの責任を与えるとき、指導者は時間を取って必要なことをわかりやすく教えなければなりません。その人を実際に同行させて良いホームティーチングの行ない方を見せたり、じっくり説明したりということも訓練に含まれるでしょう。この準備なしでは良いホームティーチングはできず、みんながイライラして、定員会の指導者は自分が問題の一端にかかわっているという認識を持たないかもしれません。

6. 進展を見守る 委任したらそれだけで、あとは眠っていても仕事はできあがり、と考える指導者がいます。しかし実際には、その後も一貫した後ろだての計画を持たないと仕事の完成はむずかしいのです。定期的に時間を取り、それまでの仕事を検討する、成果を評価する、計画を練り直す、また必要ならば訓練や指導を加えるなどが





それにあたります。進展を見守るとは、常に検査を怠らないということではなく、両者が合意して時間を取り、それまでの進展を振り返ることなのです。

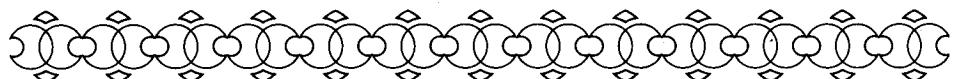
たとえば、教師定員会に定員会のパーティーとその後の食事の責任を委任した場合、定員会アドバイザーはまず明確な指示を与え、それぞれの割り当てを終えて報告する日時を決めます。アドバイザーはパーティー当日までのんびり待っていて、その日になってからあわてふためいて全員を召集し、手配ができたかどうかを確かめるのではありません。割り当てを受けた人たちを励ましたり指導し直したりする方法を考えていなかったために失敗する計画は多いのです。また、後ろだてとなつてあと押しをすることがないと、仕事を与えられた人は指導者がその計画に興味を失つてもう関心がないと思うかもしれません。そうするとやる気をなくす心配があります。

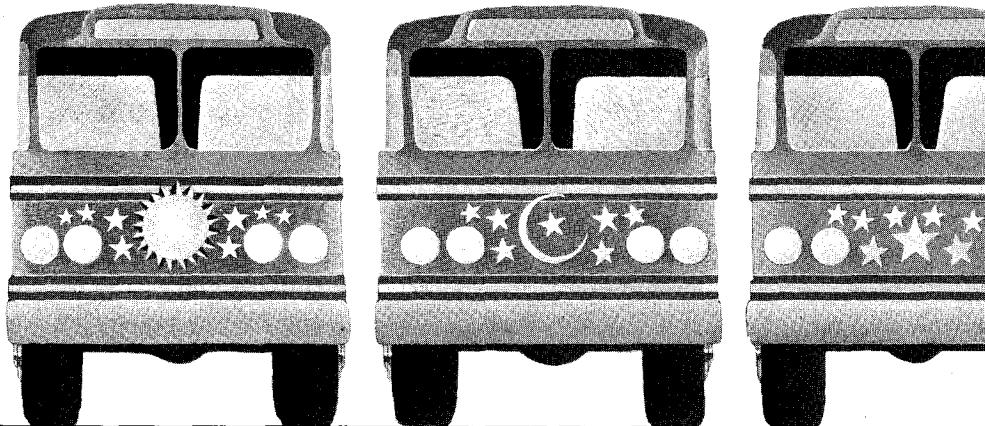
7. 任せる 指導者は自分の期待しているところをはっきり説明し、指示を与え、訓練し、その後のあと押しをするべきですが、仕事を与えた人に自分とまったく同じやり方を望むのは非現実的です。仕事を人に任せるときには、その人の技術と個性、その人なりのやり方や経験を生かして仕事をする権利を、一緒に与えなければなりません。仕事を与えられたのに、自分の思い通りにしようとしていつも目を光らせて監

視し、口をはさみ、手足を縛る人がいるとなると、不満この上ないのも当然です。仕事をする人は、自分自身というものを出して仕事をするしかないので。それを期待し、認め、あるいは大いに評価しようではありませんか。だれでも責任を受けながら成長するのですから、指導者が思っていたより良い仕事ができるかもしれません。

たとえば扶助協会副会長の司会や管理のしかたが会長と違っていたとします。もしそこで会長がそのまま見守れば、副会長のやり方もそれなりに効果的で、むしろかえって良い結果を見るかもしれません。ところが会長がこまごまと注文をつけて副会長を畏縮させたら、副会長は成長できないでしょう。

委任は単なる責任減らしの方途ではありません。それは、最終的には指導者の仕事を軽くし、引き受けた人が新しい分野で進歩成長する、より大きな計画、指導戦略なのです。本腰を入れた計画、明確な説明、適切な指導、その後のあと押し、それに、委任された人がその人のやり方で働くを喜んで認めてあげること、これが上手な委任のこつです。(ウィリアム・G・ダイヤー：ブリガム・ヤング大学経営学部長、「行動科学」の権威)





成 功を妨げる邪魔物の中でも最もやっかいなものに、自分の望まない物事のために多くの時間を取りられることがあります。かなり前にハリー・エマソン・フォスディック博士が語った「バスを乗り違えて」という物語には、私たちにとって大切ないくつもの教訓が込められていると思います。これは、ミシガン州のデトロイトへ行くつもりでバスに乗った男の話です。長い旅路の果てに終点に着くと、そこはカンザス州のカンザス・シティーでした。彼は初めそれを信じませんでした。ウッドウォード・アベニューへ行く道を尋ねて、そんな通りはないと聞かされると腹を立てました。ないはずはないとわかつっていたからです。しかし、しばらくすると、自分でいくらそのつもりでも、今いるのはデトロイトならぬカンザス・シティーであるという

事実に、彼は目を開かされたのでした。万事はうまくいっていました。ただ、乗ったバスを間違えたというほんの小さな一事を除いて。

人生の途上で、大勢の人間が行くつもりでなかった場所に着いてしまいます。名誉、幸福、成功という目標を掲げながら、バスを乗り違えて、不名誉、失敗、不遇の終点に運ばれてしまうのです。私たちがこの世に生きるひとつの主たる目的は、次の世に對して備えることです。私たちの終点は大きく分けて3つあり、パウロはそれぞれのすばらしさを日と月と星の輝きに比べています。彼は、「この星とあの星との間に、栄光の差がある。死人の復活も、また同様である」(Iコリント15:41-42)と語りました。

明らかに、これらの栄光のうちで一番望

バスを乗り違えて



七十人第一定員会名誉会員
スターリング・W・シル

ましいのは、生命へ通じる狭くて細い道の終点にある、太陽の輝きに例えられる栄光です。ところが残念なことに、旅をする私たちにとっては、イエスが指摘されたように、このあらゆる場所のうちで最もすばらしい場所へ到着する人がごく少数なのです。だれもが日の光栄の王国に着きたいと思っています。そこは天の天、神とキリストがおられる所、家族の天国です。しかしその至高の天について語りながら、最低の地獄に向かうバスに集っている人が大勢います。

3つの王国のうちで一番望ましくないのは星の光栄です。それは、小さな星のまたきが昼間の太陽のまばゆさに劣る通り、日の光栄にはるかに及びません。聖典には、星の光栄に到着する人は、浜辺の砂、天空の星のようにおびただしい数であると言われています。またその人々でさえ、その終

点にたどり着く前に、地獄の罰を受けて罪を清められなければなりません。膨大な数の人々がこの本意でない場所にたどり着くのです。

サタンもバスを乗り違えました。最終審の判事である神がすでに判決を下されたため、私たちは今サタンの行き着く先を知っています。しかしサタンは決して初めからこの不面目を期していたのではありません。かつてサタンは、光明を持つ輝ける暁の子ルシフェルとして神の近くに立っていました。彼は大志を抱き、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう」(イザヤ14:13-14)と言いました。ところがこのすばらしい目標を掲げながら、実際は底なしの穴に向かう反逆のバスに乗ってしまったのです。

人生のどこかで、望みもしなかった場所に到着した経験のある人は多いと思います。初めから破産するつもりで良い教育を受けたり事業に投資したりする人はいませんし、みじめで不幸な離婚を念頭に置いて結婚相手を選ぶ人はいません。殺人者、自殺者、麻薬中毒者、アルコール中毒者など、大勢の人々が初めにそのような行き先をまったく想像もしないで出発しています。犯罪や不道徳を犯して、更生施設や刑務所にいる人々は、行く先を計画したときからそこの場所を考えていたわけではありません。

身につけて最も価値ある才覚は、行きたい場所へ連れて行ってくれるバスを見分ける能力ではないでしょうか。

私は以前に、両親に対して強い反抗心を抱いている娘さんと話をしました。彼女は自分を、愛されていないよけいな者と感じていました。教会に出席したり正しい生活態度をとったりすることは親に降参することだと考え、満たされない愛の埋め合わせに、悪友と良くない交際をしていました。彼女の生活は苦渋に満ちていました。間違ったバスに乗って間違った人々の仲間入りをしそうな態度と暮らしぶりです。奇跡のようなことが起こらない限り、そのまま、念願のデトロイトとは違うカンザス・シティーに連れて行かれてしまうことでしょう。

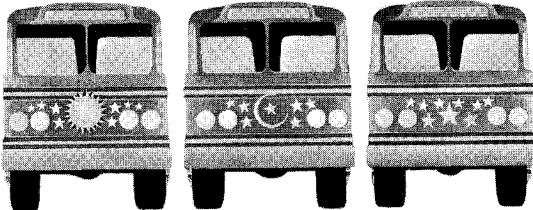
初めから神経衰弱や離婚や刑務所生活を目指して出発する人はいないと思います。しかし、身につき始めた習慣の鎖が軽すぎて、切れないほど強くなるまで気づかないこともあります。自分の人格という畑に死の種が植えつけられるのを放っておいた

ために、どうしようもない悲劇に見舞われることがあります。その死の種はことのほかしづとく、私たちの生活にいったん根をめぐらすと絶やすのが非常にむずかしいため、豊作の祈りはたいていの場合空しいものとなります。

心に高い目標を掲げても、行き先の違うバスに乗ったときに、「自分には気高い目標がある」とひとりごちただけでは状態は何も変わりません。大事なのは実感です。私たちは「つもり」ではない、自分の言葉によって裁かれるのです。そのときに、「地獄の道は『……つもり』という言葉で敷きつめられている」という古来の決まり文句が空虚に響いてくることでしょう。

意図を握る左手に、行ないを握った右手が、今何をしているか知らせないことは多いものです。胸に立派な理想を養っていても道をはずれてばかりいると、やがて例外が原則に成り済ます心配があります。いつか立派な人間になりたい、しかしきょうはまだいいと。例えば「みだしなみや服装や言葉でわたしを判断しないでください。心を見てください」というようなことを、私たちはよく言います。これはきわめて危険な状態で、転落につながることもしばしばです。なりたくもない人間のように装い、ふるまい、考えるのに、多くの時間をかけてもよいものでしょうか。

私たちは反抗という制服一式の、どの小物をも捨て去る必要があります。ピエロの衣装でパレードに加われば、おそらく王のように考えたり、ふるまつたりはしないでしょう。わずかな善事を行ないながら、たくさん例外を作ることはいけません。細



くて狭い道の終点にある永遠の生命を目指しながら、死に至る広い道で時間を浪費してはなりません。

犯罪者や罪人や軟弱な人でさえ、自分のよりどころとする立派な理想や望みを抱いているのです。そのことを心に留めておくとよいと思います。私は州刑務所で大勢の受刑者が話をする宗教的な集会に出席することがあります。彼らは例外なく「世の中の立派な人間がこの刑務所にもいる」と語っていました。いろいろな点でそれは本當だと思います。服役中の人の中には、世間の人より思いやりが深く、親切で謙遜な人々がいます。いざとなれば、友達に着ているシャツを脱いで与える人がいます。真理についてすぐれた証を持ち、すばらしい祈りを捧げる人がいます。それでも彼らはだれかを殺したり、銀行強盗をしたり、してはならないときに酩酊したり、義ということについて多少規準が甘かったりというように、小さな間違いを犯してしまったのです。彼らは行こうと思わなかった所に足を向けていました。私たち自身も盲点をかかえており、実際の自分の姿が目に入らないときがあることを忘れてはならないと思います。

多くの人が、道徳を逸脱しながらこれも経験だと考えています。多くの人が物を故意に破壊したり学校に放火したりすることよりももっと悪いことをしています。デトロイトでもカンザス・シティーでも、行く

先はどこでもかまわないというのなら、少しの不注意やうそも別にかまわないでしょう。

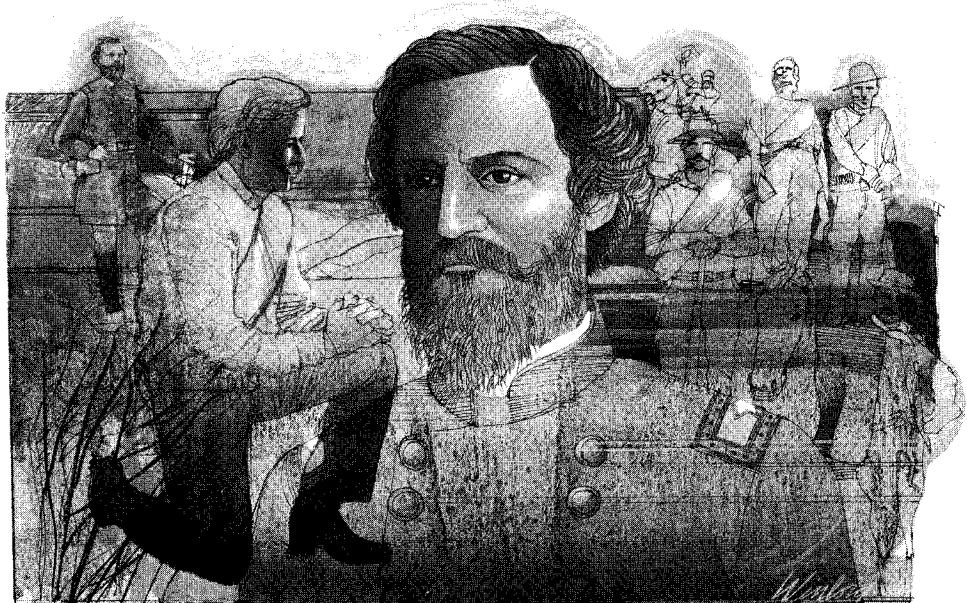
心に行きたい場所をはっきり定め、それから目的地まで一直線に道を定めるのは、実に良い考えです。例外が非常に危険なことを忘れてはなりません。良い行ないが良い習慣を築きあげるよりもずっと早いスピードで、例外は良い習慣を崩していくのです。千回誘惑をしりぞけてきて、たった一回のきまぐれですべてが無になることもあります。地獄から天国へは千の階段、天国から地獄へはわずかひとつの階段、という言葉があります。

理想も、しっかりすがっていなければ、あまり役に立ちません。一度信仰を告白するかあるいは何らかの事情によってたちまち人は救われるという昔ながらの狭い考えは、はなはだ有害となります。人は、一度きりの出会いで敵と闘って、それで全軍を制圧することにはなりません。闘いは続けて勝たねばならないのです。大勢の人が真理の福音について証を述べながら、恥辱と墮落の終点へ向かうバスに乗り込んでいます。死の種はたいして大きくともよいのです。悪の大木は、罪の小さながらし種からでも育つのですから。その木に育ってほしくなかつたら種をまかないことです。

では、世の中で最も大切な原則のひとつに戻りましょう。それは、まず自分がどこへ行きたいかを知ること。次に、そこへ連れて行ってくれるバスに乗り込むことです。

トーマス・ケイン

著者：スザン・アーリントン・マドセン



とも

かいたくしゃのお友だち

トーマス・ケインたいさは、アメリカの大とうりよう、ジエームズ・ポークのつかいとして、1846年にモルモンのかいたくしゃたちのところへ、やってきました。そのとき、かいたくしゃたちは、アイオワでキャンプをしながら、ミズーリ川をわたるしたくをしていました。ケ

インたいさは、モルモンが何回もはくがいされ、家をあい出されたことを、新聞で読んで知っていました。あるとき、ケインたいさは、キャンプの近くの森をさんぽしていました。ふと気がつくと、ひとりのかいたくしゃが、おいのりをしていました。たいさは、立ちどまって、耳をすま



しました。かいたくしやは、へりくだつて、かいふくされたふくいんをかんしやし、「たびのあいだ、せいとたちを、おまもりください」と、いのつっていたのです。

トマス・ケインは、^{きょうかい}教会には入りませんでしたが、このことにかんどうして、それからというもの、しぬまで、せいとたちの友ともになつたのでした。

トマス・ケインは、おくさんのエリザベスや^{どん}4人の子どもたちといつしょに、ペンシルベニアしゅうにすんでいました。ケインたいさは、せいふのやくにんに、たくさん知り合いがいて、その人たちからとてもしんらいされていました。ですから、^{くに}国とせいとたちのあいだのごかいをとく手だすけができるのです。ケインたいさは、何回かせいとたちを、たすけました。

まず、せいとたちがたびのお金にとてもこまつていたときのことです。ケインたいさは、ポーク大とうりようだいに会い、500人のモルモンをりくぐんに入れるようにたのみました。こ

れが、モルモン大たいです。モルモン大たいが國からもらつたお金で、かいたくしやたちは、ほろ馬車や、たびにひつようなものを買うことができました。

ケインたいさは、ブリガム・ヤングととてもよい友ともだちになりました。たいさは、何回もせいとたちの家をたずねて、せいとたちが、ふくいんのあかしにしようじきなことにかんどうしました。それに、せいとたちのぎせいや、あいにもあどろきました。かいたくしやたちは、食べものもなく、とてもたいへんな目にあつていましたが、それでもぎせいをはらい、あいをしめしていました。

アメリカの東とうの方ほうで、ケインたいさは、せいじ家や、新聞きしやや、いろいろな人々ひとびとに、せいとたちのことを話し、せいとたちの生き方いなかたをほめました。せいとたちがソルトレーラーにつくと、ケインたいさは、しゅうせいふがつくれるように、せいとたちをたすけました。せいとたちは、あれいにソリのざせきにしくオオカミの毛けがわと、モルモン大たいが力



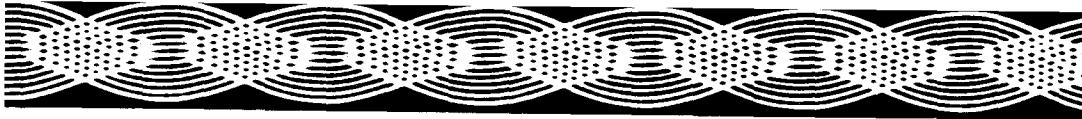
リリフォルニアからもつてきた金をあげました。

またあるとき、ケインたいさはブリガム・ヤング大かん長と、ジエームズ・ブキヤナン大とうりようのあいだに立って、ごかいをとくためにはたらきました。そのごかいがとけなければ、せいとたちは、國とせんそうをしなければなりませんでした。ぐんたいは、もうユタにむかっていました。でも、ケインたいさのたすけがあつたので、せんそうにならずにすみました。ウイルフォード・ウッドラフ大かん長は、後にこういいました。「あなたは、神のみ手にあるうつわだつのです。あなたは、つるぎをさやにおさめさせるよう、神かられいがんを受けたのです。」

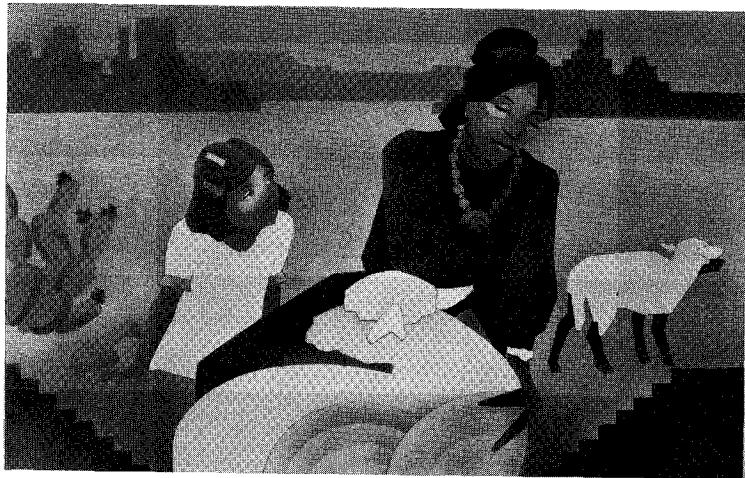
ケインたいさは、ペンシルベニアに帰りましたが、その後もせいとたちを心にかけ、何回もせい

とたちの家をあとずれました。1883年、ケインたいさがなくなると、おくさんから何人かのせいとたちに手紙がとどきました。手紙の中には、ケインたいさがなくなる何時間か前に「できるだけていねいなあいさつを、わたしのあいするモルモンの友だちみんなに、あくるように」といつたと、書かれていました。





ニタのひつじ



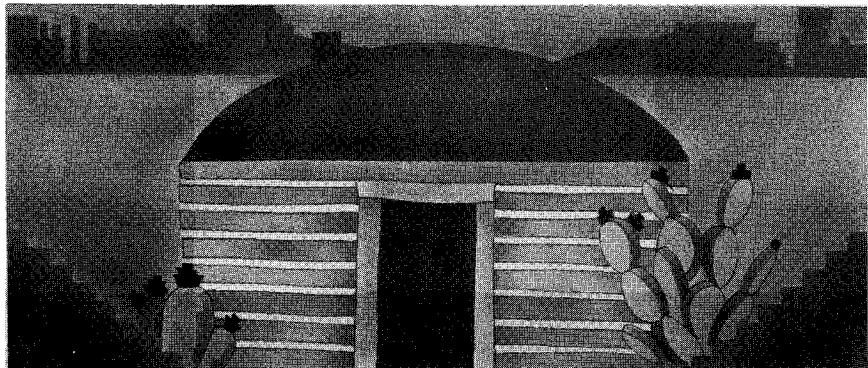
お話：エリザベス・フリット

タは、ナバホインディア
ンの女の子です。ニタは、
さくの外から手をのばして、ひつじの毛をすきながらいいました。「さあ、毛をかってもらおうね。こわくないよ。いたくないからね。」

ひ かあ
その日、母ちゃんと、ばあちゃん
は、ずっとむれのひつじの毛をかつ
ていました。むれの中には、ねえち
やんや、にいちゃんのひつじもいま

した。ニタのもいました。ニタは、
はじめて自分のひつじをもらったの
です。ばあちゃんは、きょうな手つ
きて、ニタのひつじの毛をかりまし
た。まるで、きものを1まいぬがし
たみたいでした。

「こんなに、やせちゃつたあ。か
わいそうに」と二タはいいました。
二タは、もういちどひつじの毛のき
ものをきせて、もとどおりの赤ちや
んひつじにもどしてあげたいな、と



思いました。二タは、なんだかかな
しい気もちになって、ばあちゃんと
いつしょに、家へ帰つていきました。
夕日が地めんや岩を、まつ赤にそめ
ていました。

二タは、ばあちゃんより先に走つ
ていって、いいました。「ばあちゃん、
サボテンの花がさいてるわ。」

二タはとげにさされないように、
遠くからサボテンの花の花びらに、
さわりました。花びらはとても大き
くて、口ウをぬつたようにツヤツヤ
でした。「お家へもつていきたいな
あ」と二タはいいました。

「サボテンの花はすぐしほんでし
まうんだよ。実になるまで、そつと
してあいておやり。」ばあちゃんは、

いいました。

二タは、ホーガンにすんでいまし
た。ホーガンというのは、木と木の
かわでつくった、インディアンのま
い家です。家のまわりには、まわり
の岩と同じ色の土がぬつてあります。
インディアンの男の子は、馬やポニ
ーのせわをしたり、トウモロコシや
スクワッッシュを作つたり、父ちゃん
の手つだいをしたりします。そして、
女の子は、ひつじの番をしたり、毛
糸をつむぐのを、手つだつたりしま
す。二タの田ちゃんは、もうふや、
しきものを作るのがじょうずでした。
でも、ばあちゃんはずつとずつとじ
ようずで、ナバホのみんなが知つて
いました。

夏のあつい日^ひのあいだ、二タはねえちゃんたちといつしょに、ホーガン^{ホーガン}の前にすわって、ぼうでひつじの毛^けをたたきました。そうすると、毛についてたほこりもとれるし、けばも立つのです。それから、すきぐしでひつじの毛^けをすいて、せんいをそろえます。二タは、自分のひつじの毛^けを、とくにねんいりにすきました。そうすれば、ばあちゃんが、それをつかって、しきものがあるだろうと思^{おも}ったのです。

二タは、毎^{まい}ばんばあちゃんが、毛糸^けをつむいで、糸^{いと}まきにまいていくのを見^みていました。「どうして、そんなに何回もまわすの」と二タは聞きました。すると、ばあちゃんは二ツコリわらっていいました。「まわせばまわすほど、よい糸^{いと}ができるのさ。よい糸^{いと}ができれば、よいしきものができるんだよ。」

ばあちゃんは、きかいでつむぐほう^が、すきでした。それに、色^{いろ}も明るい色^{いろ}が好きでした。ばあちゃんは、お店から、毛糸^けをそめるせんりようを

買^いってきました。あるばん、みんながあつまって、自分の毛糸^けをそめるせんりようをえらびました。

「青みどり！ 空^{そら}いろの色みたい」とマリアがいいました。
「き色^{いろ}、お白さまみたいだ」とジョリー。

「赤^{あか}、まつ赤だ」とベンも、大声^{おおごえ}でいいました。その3つの色は、田ちゃんのしきものには、いつも入っていました。

「ぼくのひつじは黒^{くろ}いんだよ。だから、そめなくていいんだ」とロマンがいいました。すると、ジョニーもいました。「ぼくも、白^{しろ}のままがいいなあ。それに、ロマンのと、ぼくのをより合わせたら、ネズミ色^{いろ}になるよ。」

田ちゃんも、ばあちゃんも、いつも黒^{くろ}と、白^{しろ}と、ネズミ色^{いろ}をつかいます。でも、ばあちゃんは、お店から買^いってきたせんりようはつかいません。木のねっこや、カワや、実^みや、はつぱをにて、自分でせんりようをつく^{つく}るのです。

マリアがいいました。「ねえ、二タちゃん、ちや色にしなさいよ。ばあちゃんが、いつもつかうじゃないの。」

でも、ちや色は、あんまり、パツとした色ではありません。二タだって、明るい色がすきなのです。

ある日、二タはばあちゃんといつしょに、せんりようを作る木をさがしに、近くの山に行きました。もう、空気がつめたいのではっぱは、赤やき色にかわっていました。

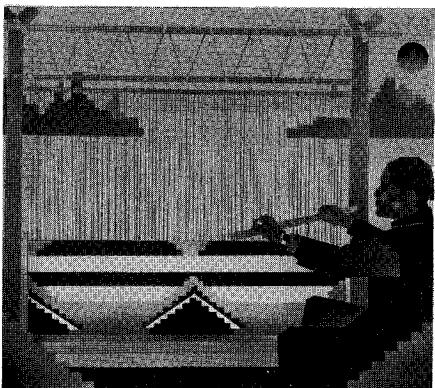
「わあ、きれい。」二タはみきやはっぱの赤くなつた、マホガニーのねっこを、ひきぬきながら、たずねました。「これ、赤いせんりようになるの？」すると、ばあちゃんが、答えました。「いいや、ちがう。ちや色だよ。」

家へ帰るとちゅう、春に見たサボテンのところを通りました。もう、こい赤の実ができていました。「あれを、もいでいこう。あの実は、バラ色のせんりようになるんだよ。」ばあちゃんがいいました。

「でも、ばあちゃん、バラ色のし

きものなんか、作ったことないじゃない。」二タは、むねをあどらせながら、いいました。すると、ばあちゃんがいいました。「そうだね。わたしは、これをちや色のせんりようとまぜて、インディアンの色を作るんだよ。わしらをまもってくれる土の色をね。」

二タは、岩のあいだに見えるホーガンをながめました。ホーガンは、



夕日の中で赤っぽいちや色に見えていました。「あんな色？」と、二タは、ホーガンをゆびさしながら聞きました。「そうだよ。今、わたしは、しきもののデザインを考えているんだよ。夕ぐれ時のインディアンの土の

いろ
色をつかって、四角をたくさんくみ
あわせたデザインはどうかね。」

「そんなら、わたしのひつじの毛,
その色でそめて。」ニタは、いいました。
やがて、雪がふりだし、コヨーテがほえるようになりました。ニタは、はたの前にすわって、ばあちゃんがしきものを見るのを見ていました。しきものは地の色がネズミ色で、
黒いふちどりがあり、白と、黒と、
インディアンの赤っぽい土の色の四
角や長四角のデザインでした。

やがて、こありがとけ、ふぶきも
やんで、すなあらしがふくようにな
りました。ばあちゃんは、しきもの
を、はたからとりだして、ゆかにし
きました。ニタは、そつと赤ちや色
の四角にさわりました。

「ここんとこが、わたしのひつじ
の毛ね。トゲトゲのサボテンとマホ
ガニーの木でそめたんだわ。」

ばあちゃんは、しきものを、クル
クルとまきはじめました。「さて、売
りに行かなければやあ。こなや、さと
うや、かんづめ、それに、きものが

いるからねえ。」

きれいなしきものを売ってしまう
のかと思うと、ニタはかなしくなつ
て、自からなみだがあふれました。

「おいで。」ばあちゃんがいいま
した。「父ちゃんが市場まで、自動車で
つれてってくれるってさ。行けば、
ハツカアメがもらえるよ。」

ニタは、ニッコリわらっていいま
した。「ねえ、そろそろひつじが子
どもを生むころじゃない? わたし、も
う1とうもらってもいいかなあ。」

すると、ばあちゃんがいいました。
「いいともさ。もう1とうもらいた
い。前のヒツジも、もうすぐ毛が
はえるよ。それにサボテンにも花が
さくし、そうしたら、また山にせん
りようをとりに行こう。こうやって、
土は、わしらをまもってくれるんだ
よ。」

ニタは、いいました。「わたし、こ
んどは、はたおりをならおう。ばあ
ちゃんみたいに、すてきなものをい
っぱいつかって、はたをあるんだつ
と。」

かみさまとのやくそく

お話し：パット・グレアム



だれでも、みずとれいとからうま
れなければ、かみのくにに、はいる
ことはできない。(ヨハネ3：5)

バプテスマの^ひ白をわすれてはいけ
ません。バプテスマをうけたところ
を、おぼえのふみにはっておきたい
ですか。それもいいですね。あなた
は、せいさんをうけるたびに、バプ
テスマのときにかみさまとしたせい
やくをおもいだすでしょう。そして、
イエスさまのおしえにしたがうよう
にするときには、そのやくそくをま
もつているのです。バプテスマは、
いろいろなところでします。どこで
も、よいのです。でも、からだがぜ
んぶ、みづにつからなければいけま
せん。それに、しんけんしゃが、お
こなわなければいけません。

ぬりえ：きれいにぬってください。
それから、好きなひとに、バプテスマ
のおはなしをしてあげましょう。

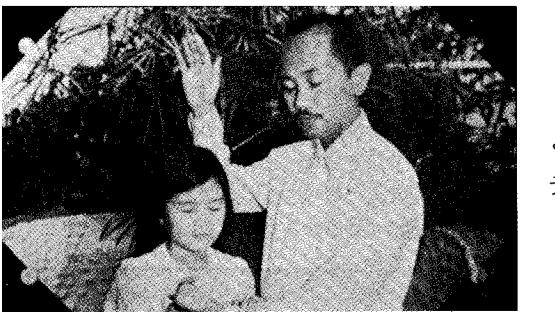


1. バプテスマは、アダムのと
きにはじまりました。アダムか
ら、アダムのこどもたちに、し
んけんがつたわりました。



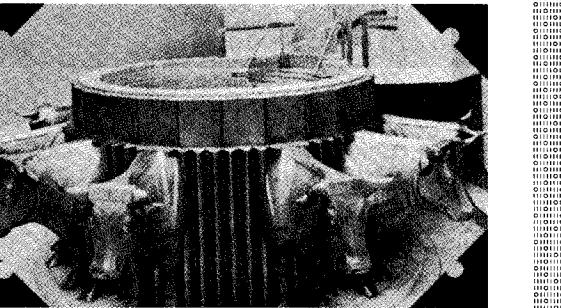
2. イエスさまは、バプテスマのヨハネから、ヨルダンがわで、バプテスマをうけました。(マルコ1：9)

3. アルマは、モルモンのいすみで、200にんいじょうのひとにバプテスマをほどこしました。(モーサヤ18：12-17)



4. いまのこどもたちは、ふつう、きょうかいのバプテスマフォントでバプテスマをうけます。

5. どのしんでんにも、バプテスマフォントがあります。そこでは、ししゃのためのバプテスマがおこなわれます。



私 は こ う ら し て い ま す 1

子供に バプテスマの備え をさせるには

父 親として自分の子供にバプテスマを施す以上に栄誉ある、また満ち足りた神権の儀式はないのではないかと思います。

1年にわたる家族ぐるみの準備の末、最近私は長女にバプテスマを施すことができました。その準備の様子をご紹介したいと思います。

まず私は時間をかけて娘のエイミーに信仰箇条や聖典を繰り返し教え、バプテスマの大切さを理解させました。

また、家庭の夕べを2回ほど使って、エイミー本人にバプテスマ会の計画を立てさせました。つまり、だれを招待するかとか、どんな讃美歌を歌ってもらうかとか、だれにお話してもらうか、とかいったことです。

招待状も、お金をかけず、手書きのものをコピーして、ワード部の会員や娘の友達に送りました。

バプテスマのテーマも娘の希望で「わたしはイエス様に従います」ということに決まり、その決意をいつまでも守るようにと私たちは娘に誓してやりました。

バプテスマと確認の儀式を受けたエイミーは、心温まる証してくれました。母親からはエイミーの名前入りの四大聖典がプレゼントされたんですが、そのときの娘の誇らしげな輝く笑顔といったらありませんでした。

その後、姉妹宣教師の心尽くしの軽い食事をいただいたんですが、このときを利用して私たちは教会員でない娘の友達と話をすることがで

きましたし、朝早くから来てくれたことのお礼も言うことができました。エイミーの下の娘たちも、よほどこのバプテスマ会が気に入ったと見えて、2歳になる娘は毎日「いつかあたしもおねえちゃんみたいにバプテスマしゆるんだ」と言っているんです。(インディアナ州ジェファーソンヴィル、ウィリアム・D・フリーズ)

●白いバプテスマローブ

私 と夫は娘たちに、幼いときからバプテスマの大切さを理解してもらいたいと思いまして、それぞれ7歳になったときに特別な家庭の夕べを開くことにしています。そして、バプテスマを受けるまでの1年間にどんな準備をすればよいか話し合うことにしているんです。たとえば、什分の一を納めるとか、教会でお話を頼まれたときにどうすればよく準備することができるかとか、人のために何をするかとかいうようなことですね。

それから私は娘のために、バプテスマローブと確認の儀式を受けるときに着る服を白布で作ってやります。そして、白は純潔の象徴であること、純潔な人は祝福を受けること、またバプテスマも結婚も純潔な身で迎えるべきことをよくよく教えてやるんです。(ユタ州オレム、キャシー・ミンスター)

●記念写真

家 では子供たちがバプテスマを受けるたびに、自分の名前入りの覚えの書をあげることにしています。ところで、バプテスマのときには必ず2枚特別な写真を撮ることにしているんです。まず1枚は、儀式の直前に白いローブに身を包んだ父と子の写真、そしてもう1枚は、バプテスマ直後の子供と母親の写真です。この2枚の写真は、真新しい覚えの書の第1ペ

ージに貼ることにしています。

すでに5人の子供がバプテスマを受けましたが、どの子も折あるごとにその写真を見るのがことのほか楽しみのようです。下のふたりの小さい子供たちも、自分たちのバプテスマの日を今から心待ちにしています。(ユタ州ファーミントン、バーバラ・マクファーランド)

●家庭の夕べのテキストを利用した特製の本

私は家庭の夕べにある絵やレッスンを切り取って、バプテスマに関する子供用の特製の本を作成しました。子供たちはその本を使って勉強していますし、家庭の夕べではバプテスマを重点的に取りあげるようにしています。

それから、一人一人の子供の話を書いて、それを8歳の誕生日に送るんです。もうひとつ、日記帳もあるんですが、まず私がお手本に書き出しておいてやりましてね、さあこれからはあなたが自分で書いていくのよって励ましてやるんです。(オレゴン州ミルウォーキー、キャスリン・ギブソン)

●まず聖典を読んでから

子供たちの通っている小学校には、うちの子供たち以外に末日聖徒はいません。そこで私たち夫婦は、バプテスマの大切さを理解するために、何か特別な思いをさせてやりたいと思っていたんです。すでに9人の子供(もうすぐ10人目の子供が生まれます)のうち5人がバプテスマを受けてるんですが、どの子も次のようなステップを踏んだんですよ。

①バプテスマを受ける前に必ずモルモン經を読み終えておく。中には新約聖書や高価なる真珠を読み終えた子もいる。②男の子にはバプテ

スマのあとで着る真っ白のシャツとネクタイを両親から贈る。女の子には私がバプテスマのあとに着た思い出の服を着せてやる。(③8歳のお誕生日には友達を呼んでパーティーを開く。

(オクラホマ州ポンカ・シティー、リニー・シンプソン)

●王国への鍵

「これ、何に使うか知ってる?」と私が息子に鍵を渡して尋ねると、「うん、ドアを開けるのに使うんでしょう」と答えたので、しましたと思ってこう言ってやったんです。「その通りよ。バプテスマもこの鍵と同じなの。バプテスマは天のお父様の王国に入るための門を開いてくれるのよ。」それ以来、息子はバプテスマの記念にと、今もその鍵を大事に持ち歩いているんですよ。

ほかにこんな方法もあるんじゃないでしょうか。たとえば、バプテスマ会のとき、子供の写真やいわくのある品々をテーブルに飾っておくんです。(テキサス州グランパリー、ギニ・ナイマン)

チェックリスト

1. バプテスマ会への招待者、話し手、讃美歌をバプテスマを受ける当人に選ばせる。
2. バプテスマや確認の儀式、そして結婚式のときに純白の衣装を身にまとうことの大切さを教える。
3. バプテスマ前後に父母と一緒に写真を撮り、それを覚えの書に貼っておく。
4. テキストの絵などを利用してバプテスマに関する特製の本を作る。
5. 子供にバプテスマの思い出として鍵を贈る。

絵ハガキの輸出が取り持つた私の改宗

大阪北ステーキ部
京都洛北ワード部

広田 大右



私 が役員をしております会社は、絵ハガキやポスターを出版しています。歴史は80年と古いのですが、社員は25名と小じんまりとした会社です。それでも得意先は日本中になりますので、どこかに旅行されたときに、私たちの製品を買っていただいたことがあるかもしれません。

私が現在の会社に入社した頃、白黒写真に人工的に着色した天然色絵ハガキから、カラーフィルムで撮影して製版印刷する新方法により、以前とは比較にならない美しい絵ハガキができるようになっていました。それとともに技術の差が製品にはっきりと現われるようになっていました。それまではスイスやイタリアのものを見ると、その出来栄えにただ感心しているだけでしたが、知らないうちに日本でそれ以上の物が作れるようになっていました。

12、3年前になりますが、ワーグナーさんというひとりのアメリカ人が会社に訪ねて来られ、アメリカで日本の絵ハガキやポスターを売ってみたいというお話をありました。初めてその人に会ったときに非常に強くひかれるものがあり、とても澄んだ目をした上品な人で好感がもてました。日本の上場企業から特別なネジを仕入れ

て、アメリカで手広く商売をしている優良企業のオーナーでもありました。

当時英会話がほとんどできなかった私に通訳を通して、彼が裸一貫から会社をこれまでにしたことや、仕事が一段落したので長年の念願だった趣味を生かし、ピクチャービジネスをやりたいから製品を分けて欲しいとの話がありました。私はすぐに引き受けたのですが、社内では全員がその話に消極的でした。けれども無理を言ってお願いし、注文を受けることを承知してもらいました。しかし、最初の5年間はほとんど注文らしいものではなく、やはりだめかとあきらめかけていたのですが、その間に彼は、組織作りと周到な市場調査を行なって基盤を築いていました。

6年目に先方はインパクトという新会社を設立し、アメリカの風景写真を使ったポスターや絵ハガキを発注してくるようになりました。私も当時の技術で取り入れられることは何でも行なって最高の品質を保てるように腐心しました。また大型カメラをつかいで、撮影のために渡米し、良い写真が製品のポイントであることを認識してもらうようにも努めました。お陰でインパクトに輸出した製品は各地で信じられないほ

ど好評を博し、ワーグナーさんたちの販売努力の効あっておもしろいほど売れるようになりました。

何度も行き来するうちに私の英会話もだいぶましになりました。ワーグナーさんの家族や社員の人たちとも親しく交際できるようになりました。彼らの人柄を知るにつれ、いろいろな点で驚き、感心させられ、目を見はるような経験を多くするようになったのです。お酒やタバコを飲まない変わった人たちだと聞いていたのですが、陰日向なくよく働くのにはびっくりさせられました。^{ひなた}社員のほとんどは20歳そこそこの若者が多いのですが、アメリカの若い入たちは働くより遊ぶ方が好きだと思っていたので驚きました。また正直で、仕事の上で何か問題が起きてても最善を尽くして対処してくれますし、無理なことは決して要求したりしません。かけ引きもありません。年上のこちらが教えられることばかり。日本のやり手の得意先しか知らないかった私にはありがたくて、不思議にすら思えました。

ワーグナーさんやほかのどの家庭を訪ねてみても、息子や兄弟が帰って来たように温かく歓迎してくれますし、明るくなごやかな雰囲気につつまれていて、とてもうらやましく思いました。やがて日曜になると教会に誘われるようになり、彼らが皆末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることを知りました。またモルモンとしての信仰と生活信条があるがゆえに、彼らがそんなにすばらしい人たちであると知ったのです。

ワーグナーご家族からプレゼントされた日本語のモルモン經には彼らの心からの証が記されていて、それを読んでいるうちにモルモン經が真実なものであるとの確信を深め、改宗を決意しました。1年ほど入れ替わり立ち替わりいろいろな宣教師からレッスンを受け、1980年11月

にバプテスマを受けました。

ワーグナー兄弟によってバプテスマを受けた日、彼の家族やインパクトのおもだつた人たちもわざわざ京都まで来て祝福してください、忘れられない感動的な一日として胸に深く刻まれることになったのです。

その後も、大きな恵みをいただいて会社は順調に発展しています。社内にも末日聖徒は3名となり、今ではアメリカだけでなくヨーロッパや中国を初め東南アジアにも絵ハガキを輸出しています。しかし、生産能力のほとんどはインパクト向けです。互いにモルモンとして、ゆるぎない信頼感を持って日々の業務に励めるのはとても幸せに思います。

信仰と職業について考えるとき、私ほど恵まれた環境にいる人間はないのではないかと思います。神様のみこころに添った働きができるよう最善の努力を払い、ひとりの末日聖徒として美しい絵ハガキやポスターを作り世界に大きくはばたいていきたいと願っています。(ひろた・だいすけ 1941年生まれ、京都洛北ワード部第一副監督)

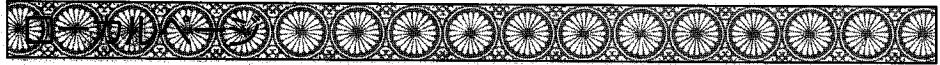
1年半の伝道から 私の学んだこと



東京北ステーク部
中野ワード部
江口 由利子

私

が専任宣教師として名古屋伝道部に召されたのは1981年12月です。他の多くの



日本人の兄弟姉妹と同じように改宗者であり、バプテスマを受けた頃は伝道に出るために多くの困難があるように感じていました。でも「証があるのになぜ伝道出ないのですか」との問い合わせを投げかけてくれたひとりのアメリカ人宣教師の言葉がいつも心にささやきかけ、その言葉が忘れられませんでした。

伝道に出ようと決心したのはバプテスマを受けてから1年半ほどたったときです。福音の知識が少ないのならもっと勉強しよう、お金が足りないなら、もっと働いてお金を貯めようと思いました。家族のためにいつも祈りました。そしてそれから1年後、伝道の召しを受けました。

私に与えられた試練がそんなに大きなものだつたとは思いませんが、「本当の決心があればどのような困難にも打ち勝つことができる」と思いました。それは伝道の準備をしながら、また1年半の伝道を通して私が学んだことのひとつです。

伝道中には多くの方々に出会います。福音を聞いて生活を変えようと努力するときに求道者の方々も多くの障害に突き当たります。たくさんの犠牲を払われる方々の姿を見て、私自身この福音がどれほど貴く、犠牲を払う価値のあるものであるかを改めて感じさせられました。

受験勉強で忙しいはずのある高校3年生の女の子は、バプテスマを受けるまでの短い間にモルモン經を1回読み終えました。またある奥さんは事情があってとても苦しい生活をしておられましたが、それでも彼女はわずかな収入の中から分の1を納められました。これから的人生の中で私が試練にあうときに彼らの模範を必ず思い起こすことでしょう。

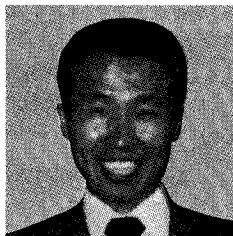
名古屋市で伝道していたときに出会ったひとりの奥さんは、あるプロテスタント教会の信者の方でした。とても親切な方で、私たちを快く

迎えてくださいました。何回目かの訪問で「永遠の進歩」のレッスンをお伝えしました。このレッスンでは前世の状態、現世の生活、死と復活、そして神のようになり永遠の生命を受けるまでの道程と、大切な原則を学びます。この方はご主人も熱心な信者で20年以上も聖書を読んでおられました。「永遠の進歩」のレッスンの中ではたくさん聖句を聖書から引用します。彼女がいつも読んでいる新約聖書からそれまで深い意味をわからずにいた大切な聖句をいくつも読んでいくうちに、深く考えておられるようでした。

レッスンの最後に彼女は、「今までこのようなことを考えたことはありませんでした」と言われ、ひとつのエピソードを話してくださいました。その方の行っている教会で、ある年配の方が死後のことについて不安に思い、牧師に「死んだらどうなりますか」と尋ねたところ、その牧師は何も答えず、ただほほえんでいました。そして「天国に入るためには準備をしましょう」と言われたそうです。

しかし、私たちは天国がどのような所で、どのようにしてそこへ行くことができるかを知らずに、そこへ行く準備ができるでしょうか。私はこの奥さんとお会いし福音をお伝えするときに、私たちの教会には救いに必要な、すべての教えと儀式があることを強く感じました。私たちが回復された眞実の福音を宣教師から教えられ、人生の眞の目的を知り得たというのは、大変すばらしい特権です。

伝道中にいろいろな町に行き、一つ一つの家のドアをたたきました。そして、人間の力だけでは決して果たせない神様の不思議な業を数多く目にしてきました。伝道が確かに神様の業であることを心から証します。(えぐち・ゆりこ 1957年生まれ)



あのとき あのころ

—初等協会の責任を通して—

東京北ステーキ部浦和ワード部

赤井 英臺



●初等協会の活動で製作された怪獣

き ょうは仕事も早く終わり、ひとり部屋の中で、昔のアルバムを繰りながら、懐かしい人、心に残る思い出と一緒に空想の世界に旅立とうとしていました。そのとき、一枚の写真（右上の怪獣の写真）に目が留まりました。

私がパパテスマを受けて4ヶ月ほどたったとき（当時私は京都ワード部に集っていました）、監督から初等協会の教師の責任をやってほしいと頼まれました。私は子供が好きでしたし、一緒によく遊んでいたので、すぐに「はい」と返事しました。ところが、返事をした後でちょっぴり不安になりました。というのは、私はそれまで人を教えた経験がなかったのです。それに加えて初等協会の「かりうど」のクラスは5人の子供たちがいて、いつも騒がしく、とても手におえるような状態ではないと聞いていたからです。

最初のレッスンのとき、最初だから少しは静かにしてくれるだろうと、ほのかな期待を持っていたのが間違いでした。子供たちは私の目の前で、私のことなどまったく無視してけんかを始めました。私はあわててなんとか止めようと努めましたが、かえって彼らはエキサイトするのでした。初等協会の会長さんが、子供たちを引き離し、それぞれをなだめてようやく治りました。会長さんと子供たちはお互いに心が通じ合っていることを感じ、私もすばらしい教師になろうと心に決めました。

でも子供たちは一向に静かになりません。レッスンも10分も続けばよい方でした。子供たちは皆、末日聖徒の家庭で育った子供たちで福音の知識は豊富でしたし、モルモン経もよく読んでいました。聖句だってよく暗唱していたんです。私は不思議でした。本当によく知っているのにどうしてみんなに騒ぐのだろう。教員以外の子の方がずっと教会的じゃないか。福音の知識などは何の役にも立っていないような気がしました。ずっと観察しているうちに彼らは少し欲求不満になっていることに気がつきました。彼らは教会の指導者の子供たちですが、いつもお父さんが仕事や教会の責任で忙しく、ほとんど遊んでもらっていなかったのです。また教会に来ても集会ばかりで、心にたまつものを発散させることができないため、「ぼくたちと遊んでほしい」「ぼくたちを理解してほしい」「ぼくたちを認めてほしい」といった彼らの強い願望が、私たちに対する小さな抵抗といった形になって表われたように思います。

当時、初等協会では活動の時間が土曜日にあり、礼拝堂で開会行事をしたあと、教室で簡単なゲームや工作をしていましたが、彼らは十分満足していなかったようです。そこで私は彼ら

と一緒に何かおもしろい物を作ろうと考え、思いついたのが怪獣でした。幼いとき、ゴジラ、モスラ、キングギドラなどの怪獣が大好きだったので、これなら子供たちもきっと喜んでくれるだろうと思いました。

いよいよ怪獣製作開始です。なるべくお金がかからないように針金を材料に使いました。だいたいの形を整えたとき、その大きさは身長2メートル、全長4メートルとかなり大きくなってしまい、教会のホールでは目立って仕方ないくらいになりました。ある指導者からは教会の靈性が損なわれるで「そのような物は外に出しなさい」と言われたこともありました。一部の大人たちにはあまり人気がなかったようです。でも子供たちはとてもうれしそうでした。なにせあの大きな怪獣が自分たちの物だということで、歓声を上げ、目を輝かせてとても誇らしげでした。そして怪獣を作っているときは、けんかのことなど忘れてしまっているのです。(でもまったくという訳ではなかったのですが) 子供たちの顔はいきいきとしていました。

約3カ月ほどかけてようやくできあがりました。ちょうど4月6日に大会があり、七十人第一会員のジェイコブ・ディエガー長老が来られ、その怪獣もステーキ部の要請で大会が行なわれている会場に運び込まれ、一緒に参加しました。お陰で私はディエガー長老と握手することができました。大会が終わった後で怪獣は置く場所がないためにバラバラにされてしまい、残念に思いましたが、その後で神様は大きな祝福をくださいました。

初等協会の時間、子供たちはまるで今までのことがうそのように私の言うことをよく聞くようになったのです。信じられないくらい素直になったのです。私が準備不足でレッスンをやらずに活動をしようとする「赤井兄弟レッスン

をやろう」と子供たちの方から言ってくるのです。彼らはやはり福音を求めていました。熱心に学び始めたのです。私には恥じる思いがありました。彼らの純粋な心と人を信じる目に対して心が苦しくなりました。私は人を信じていなかつたし、自分自身のことも信じていませんでした。福音もそれほど熱心に勉強していなかつたのです。私にとっても初等協会の責任は本当に勉強になりました。

あれからもう4年になろうとしています。彼らは今では神権者となり背もすいぶん高くなりました。(あかい・ひでき 1956年生まれ、浦和ワード部長老定員会第一副会長)

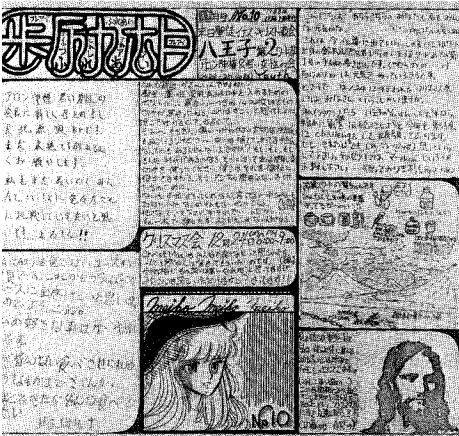
若い男性・若い女性の 機関紙「歩励相」が もたらしたもの

東京西ステーキ部八王子第2ワード部
(現八王子ワード部)

東京西ステーキ部八王子第2ワード部では、若い男性と若い女性のグループが協力して、昭和58年2月から毎月、「歩励相」と書いて「ふれあい」と読ませる機関紙を発行しています。「相互に励まし合って歩いて行こう」それが「ふれあい」なんだという題意を込めて編集しています。これまで東京西ステーキ部内の各ワード部・支部や八王子第2ワード部の若い男性、若い女性全員に渡るように郵送したり、直接訪問するなどして「歩励相」を配布してきました。

寄せ書きやマンガなどを皆が自筆で自由に書いているので、ときどきおかしなところもあり

●昨年11月に発行された「歩勵相」



ますが、皆でひとつの活動を行なうことによって、とても信じられないような大きな実を結ぶことができました。

この活動によって何人かのお休み会員が活発に集うようになったり、兄弟姉妹からお礼の手紙を受け取ったりしました。来たり来なかつたりしている教会員たちにもよい励ましになっています。また、とても喜ばしいことに、この「歩勵相」をきっかけにバプテスマを受けたひとりの姉妹がいます。12歳の石井麻子姉妹がその人です。彼女のお母さんは20年ほど前にバプテスマを受けましたが、お父さんは会員ではなかったこともあります。あまり教会に来る機会はありませんでした。彼女自身、幼児の祝福は受けましたが、教会には小さいときに少し来ただけで、長い間お休みしていました。次はその石井姉妹の証です。

「私が八王子第2ワード部に初めて集ったのは、昨年の8月です。八王子第2ワード部の若い男性・若い女性の方々が私の家に来て、『歩勵相』という機関紙を渡してくださったのがきっ



●八王子第2ワード部の若い男性・若い女性

かけです。訪問してくださった兄弟姉妹とは初めて会ったとは思えないようなとても楽しい、心はずむひとときを過ごしました。教会に、こんなに良い人々がいることを知り、また『歩勵相』にも楽しいことや、興味あることが書いてあったので、教会にとても行きたい気持ちになりました。そして次の日の聖餐会に出席しました。

やはり考えていた通り、教会の若い男性・若い女性の兄弟姉妹の親切な出迎えを受け、すぐにみんなとお友達になり、次の週も来ようと思いました。間もなくしてレッスンを受けるようになり、バプテスマを受けました。」

私は編集長という大役を負っていますが、これまで私のできる範囲で一生懸命その責任を果たしてきました。いろいろな障害も兄弟姉妹の多くの協力が得られたお陰で乗り越えられ、それらの積み重ねで、奇跡といえるような成果を見ることができたことをうれしく思っています。

(レポーター：東京西ステーキ部八王子第2ワード部「歩勵相」編集長・吉沢弘治・18歳)



●大野姉妹は専任宣教師の任期を終えて帰られた息子さんの清兄弟からバプテスマを受けた

「門を叩け、さらば開かる」

仙台ステーキ部上杉ワード部
大野 てふ子

19 81年の夏、外人の姉妹宣教師の訪れを受けました。直接外人の女性と会うのは初めてでしたので驚きましたが、巧みな日本語で「こんにちは」と玄関先でいさつをされるのには二度びっくりさせられました。お話をすると、とても気さくな方々なので親しみを持つようになりました。

1カ月後に彼女たちは私に1冊の本をプレゼントしてくれました。それが「モルモン経」だったのです。しかしながら私はそのとき、この本を開こうともしませんでした。やがて再び宣教師の訪問を受け、レッスンを受けるようになりました。その頃の私は「聞いて損はない」くらいの軽い気持ちで聞いておりましたが、質問をされるようになり、わからないと恥ずかしいのでモルモン経を読んでみようと思いました。

ニーファイ第三書第11章から読むように勧められました。不思議といねむりもせず、それどころか内容のすばらしさに、感銘を受けました。「これこそ、世界のだれもが信じられるまことの宗教だ」と思いました。それから朝は早く起きて少しづつモルモン経を読み始めました。

「求めよ、さらば求むるものを与えられる。たゞねよ、さらばたずぬるものを見出す。門を叩け、さらば開かる」(IIIニーファイ14:7)の聖句に心を打たれ、今まで二の足を踏んでいた教

会にも行って見ようという気持ちになりました。そして門を叩くことによって、どんな教会であるかを確かめてみようと思いました。

2月13日の日曜日、初めて教会に行きました。おごそかな讃美歌に救われる思いで帰ってきました。そのときの印象は求めていた心の友に出会った思いでした。宣教師や教会員の方々の明るい親切な応対がとてもうれしかったのです。私は翌週も行ってみようと思いました。

そうこうしているうちに、この教会の専任宣教師として伝道に出ていた息子が神戸伝道部での1年半の伝道を終えて昨年の3月に帰ってきました。それからは親子そろって教会に行くようになり、それは言葉で言い表わせないほどの幸せを感じました。ある日、宣教師から「息子さんからバプテスマを受けては」と勧められましたが、どうしようかと迷いました。十戒のひとつである「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト20:3)という戒めが気にかかっていたからです。私は以前に主人の病気を治すためにある宗教に入信していました。また先祖代々の仏教徒で、「私が死んだらご先祖様はどうなるのだろう」とのふたつの問題にぶつかりました。

私はイエス・キリストのみ名を通して「本当の神様を教えてください」と祈り続けました。

答えはなかなか得られませんでした。私は次第に焦り、疑いを持つようになりました。そんな私を姉妹宣教師の菅田姉妹は「誠心誠意祈つ



てください。必ず、答えが得られますから」と励ましてくれました。

それから数日後、「教会でレッスンをしてみましょう」ということになり、教会に行きました。すると山内姉妹がわざわざ私のために教会に来てくださいました。そこで宣教師からレッスンを受けました。終わってから「きょうはひざまずいてお祈りをしましょう」と言われるので、ひざまずいて、菅田姉妹からお祈りを始めました。次は私の番でした。そのときです。私は奇跡を感じたのです。まるで、頭から体全体に光が注がれたような、何かにすっぽりと包み込まれるような温かさを感じました。ああ、これが聖霊の賜かと思いました。私はあまりの感激に、声はつまり、やつとの思いでお祈りをしました。私はこのことをだれにも話さず帰りました。

食事の支度をしようと思ったときです。ふと断食のことが思い出され、「わたしも断食をして耐え忍んだったら、答えをくださるかも知れない」と考え、半信半疑ではありましたがあなから祈りました。

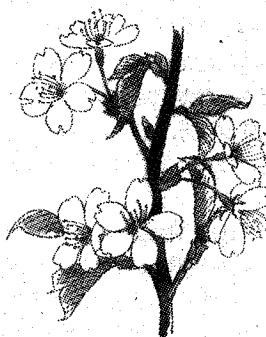
その晩、私は夢を見ました。私の前に広い道があり、そこを通ろうとしたときです。私の真正面に、黄と黒の横縞の腹を見せ、立ち向かって来る一匹のコブラがいました。私はその道を通りたいのですが、恐ろしくて困っていると、末娘が払いのけてくれました。ほっとしたのも束の間、今度は鮮明な緑のじゅうたんが果てしなく一本の道のように敷いてありました。そこにまた、太い毒蛇が体をふたつ折りにしてからみ合っているのです。夢は消えました。なぜこの夢を見たのでしょうか。何を意味していたのでしょうか。あまりに鮮明で印象的な夢であったために眠れませんでした。それからこのふたつの出来事を毎日考えましたが確信のある解答は出せませんでした。私はバプテスマを受ける前に

だれかに相談してみようと思い、日曜学校の教師の永井兄弟と宣教師の菅田姉妹に話しました。それは「神様からの聖霊による導きであり、毒蛇は前の宗教が邪魔をしていることを教えてくださいたのでしょう」と説明してくれました。

私は迷いも消えてバプテスマを受ける決心がつきました。私は神様によって洗い清められ、第二の人生を義しき者になるよう歩み始めました。改宗してから、私の生活態度はつい分わりました。毎日の生活の中にひとつの目標ができ、常に何かに向かって前進しているという心の充実感が生まれました。

特に安息日に、聖餐式に出席し、扶助協会や日曜学校で多くのことを学べるのでうれしく思います。最初のうちは「ただ講義を聞けばよい」というような安易な気持ちでいたのですが、レッスンを受けてみると、そう安易なことではありませんでした。質問されてもすぐ答える姉妹たちや教師のすばらしさに圧倒されました。

あるとき、私はレッスンが終わってからひとりの教師にどうしてそんなによくわかるのか聞いてみました。すると「なかなか大変なのよ。資料を集めたり、家事や子供のこともやらなければならないでしょう」と、神様の召しに従つて、それなりの努力をしていることを知らされ



ました。

私も何かやらなければと、ひとつの計画を立て、毎朝、15分でも30分でも早起きして聖典を読むようにしました。

また、ある日息子が「福音の原則」の本をプレゼントしてくれたので早速開いてみると、日曜学校で習っているすべてのことがわかりやすく書かれています。とてもうれしくなりました。神様が息子を通して導いてくださった

のだと感謝しました。断食、祈り、聖餐、安息日にはどういう意味があるのか心新たに理解することができたのです。

そのうちに教会でのレッスンも少しずつわかるようになり、理解力が増すにつながって、福音の眞実性と、その教えに従って生活する喜びを心から感じられるようになったのです。(おおの・ちょうこ 1926年生まれ)

30年ぶりの再会と惜別

—「我ら天にまた会うとき」—

大阪北ステーキ部花屋敷ワード部
音芳乃

昨 年の3月、主人と1週間の東北旅行をした折、30年ぶりに山形ワード部を訪ねる機会を得ました。1953年4月5日にふたりの若い姉妹と一緒にバプテスマを受けた日のことが昨日のように私の心によみがえります。山形から山寺へ汽車に乗って一緒に来てくださった多くの兄弟姉妹たち、絵のように美しい景色の中で行なわれたバプテスマ会、澄んだ雪どけの谷川の水に沈められたときのこと、優しくタオルをかけてくださった方、足もとの危ない所で手をかしてくださった方、温かい祝福の握手せめ、そしてその晩行なわれた聖餐会での確認の儀式のこと……

改宗して4カ月後、日曜学校の成人クラスの教師として召され、翌年4月には主人の勤務で大阪に戻ることになりました。当日は多くの兄弟姉妹たちや支部長兼任の宣教師さんまで山形



●写真中央の白い上着の女性が沼沢姉妹、その右隣が音芳乃姉妹（山形ワード部で）

の駅に見送りに来てくださいり感激しました。

あれからもう30年の月日が流れました。3人の子供たちも成人し、それぞれの家庭を持って独立しました。今はたまに主人と旅行をすることがあります。主人が「今年は東北にしよう」と提案したとき、私は「やっと山形へ行ける！」と心が躍りました。早速山形ワード部の高橋監督に手紙を書き、当時親しくしていた沼沢姉妹の消息を尋ねました。彼女が教会に見えているというお返事に安堵の胸をなでおろし、再会の日を心待ちしていました。

3月6日の安息日、山形ワード部に出席しま

すと皆さんが温かく歓迎してくださいました。扶助協会の部屋で、ひょっとして30年前の面影のある姉妹はいらっしゃらないかしらと、そつと見まわしましたが、初対面の方ばかりで30年の時の長さを感じました。日曜学校のクラスが始まってから沼沢姉妹が入って来られました。まぎれもなく沼沢姉妹でした。彼女に私の知っている姉妹たちについて尋ねましたが残念ながら現在まで山形ワード部に残っている会員は彼女ひとりだけでした。進学、就職、転勤、転居、結婚などの理由で当時の会員たちは山形支部を離れていかれたようです。彼女は私に「音姉妹がまだ教会に来ていらっしゃるなんて夢にも思いませんでした。ご主人は非教員で、それによく転勤されていましたね」と言われました。聖餐会で彼女と共に証をさせていただきました。本当にうれしい再会でした。30年という歳月がすっぽりと抜けてしまったようなひとときでした。

教会からの帰り、若い姉妹がご親切に沼沢姉妹と私を車で駅まで送ってくださいましたのに、駅の近くまで来てから私はコートを教会に忘れてきたことに気がつきました。沼沢姉妹は「ご主人が先に駅にこられて、待たせることになると悪いから」と気づかってくださり、私を駅に待たせて一旦車で教会に引き返し、ご自分のバイクでコートを届けてくださいました。冷たい吹雪の中を頭の先から足もとまで真っ白にして、……。私はただもうすまなくて急いでハンカチを出して彼女の髪や顔などの雪を払ってあげました。そのことを彼女はお手紙の中で「今まで、このような愛と優しさを受けたことも、望んだこともありませんでした。駅からの帰り道、雪の中で涙がとめどなく流れました」と書いておられました。私の不注意でご迷惑をかけたのに、親切を受けたのは私の方なのに、そして細かい

心遣いと愛の行為をされたのは彼女の方なのに……。

その7ヶ月後の10月2日の夜のことでした。山形ワード部の監督さんからの電話で、彼女が脳血栓でその日逝去されたことを知り、受話器を置いて、しばし茫然としていました。今度お会いするときにはもっとゆっくりお話をしたいと思っていたのに……。彼女からのお手紙を読み返しながら泣きました。彼女の手紙の一部を抜粋させていただきます。

「多くの人々が主を求め、そしてまた去って行ってしまいました。私も1950年から30年余、決してひた走りに走ったわけではなかったのです。しかしどんな状況になんて証を捨てたことはありませんでした。何ひとつ才能もなく、学問もなく、貧しさ、みじめさの見本のような私がキリスト者として、モルモンとして生きることをいつも見失わず、だれからも奪われなかつたことを神に感謝します。お会いでき本当にうれしく思いました。我ら天にまた会うときも、さぞこのような喜びの日々であると信じます。」

沼沢姉妹はこの世を去られました。でも困難な状態の中で信仰を守り通され、回復された福音と主イエス・キリストへの証を持ち続けられ、終わりまで耐え忍ぶといいうすばらしい模範を私たちに残してくださいました。

私は長年、家族の中でひとりきりの会員であるにもかかわらず、数えられないほどの恵みに浴してきました。教会での責任を果たすうえでも、神殿参入のときにも、友人や求道者の改宗のお手伝いをしたときも、危険から身を守られたことにおいても主からあふれるばかりの祝福をいただいてきたことを覚えて、心から神に感謝しています。また長い間ずっと教会に行かせてくれる主人の寛大さにも感謝しております。

(おと・よしの 1925年生まれ)

6年目の改宗

—福島、仙台、新潟の教会で
受けた導きによって—

新潟地方部新潟第2支部

山田 正



●中央が山田正兄弟

二 れといって不平不満もなく平凡に暮らしてきた私にとって、キリスト教への改宗など縁違いものでした。その私が、めぐりめぐって私の生まれ故郷である新潟でバプテスマを受けられたのは、やはり神様のみこころであったように思えてなりません。

私が初めてこの教会を知ったのは、1977年の夏です。勤務先の福島市で、ひとりの女性（現在の妻）の熱意に引かれて福島支部（現在の福島ワード部）に出かけました。借家であった教会に初めて集ったとき、十字架やステンドグラスなどに象徴される私の教会に対するイメージは、見事に打ち砕かれました。しかしながら出席していた人々の親切な態度と物静かな雰囲気には好感を覚え、よい気持ちで時を過ごすことができました。

それ以後、日曜日のデートといえば教会に限られ、結婚し仙台勤務となってからは、日曜ごとに仙台第1ワード部に出かけました。その当時はまだバプテスマを受けてもおらず、求道者という気持ちもありませんでしたので、妻に引っ張られて付き合いで集っているという状態でした。しかし、多くの会員の方々や宣教師、そして妻からいろいろな経験談や神様の教えについて聞いているうちに、いつかはバプテスマを

受けようとの思いを持ち始めました。

教会の教えが私に強い感銘を与えるものであったにもかかわらず、バプテスマを受けようと決心する勇気を持てずにいたのには、ふたつの大きな理由がありました。仕事上飲酒の機会が非常に多いことと、私が長男であり、隅々まで手入れの行き届いた先祖からの仏壇を守り継いでいかねばならないこと、ただそれだけの理由で6年間、バプテスマはもとよりレッスンを受けることも断わり続けてきました。

しかし、新潟へ転勤となつてしまらしくしてから、仙台第1ワード部で顔見知りであった寺島姉妹が宣教師に召されて新潟に来ていたことがきっかけとなり、レッスンを受けるようになりました。「レッスンを受けてみませんか」との突然の申し出に、いつもなら断わってしまうところを、顔見知りということで断わりきれず、つい承諾してしまいました。その後、他の宣教師からも含めて、半年間もレッスンを受けたでしょうか。ある夏の日、やはり宣教師である渋谷姉妹から「兄弟、バプテスマを受けてください」と、私の発奮を強く促すかのような気迫の込もつたチャレンジに、思わず「はい」と言ってしまいました。そして1983年7月31日、私は甲斐

長老により水に沈められました。

この教会の教えのすばらしさには、以前から興味を持っていました。特に、家庭を小さな天国と見たてそれを大切にすること、神殿での結び固めの儀式により死後もその関係を継続できること、さらに身代わりの儀式によって、亡くなった先祖のために救いの業を行ない、それの人たちと永遠に共に暮らすことなどは、ほかの教会にないすばらしい教えだと思います。

それらのことを知るにつれ大きく心を動かされました。

今はバプテスマを受けられて本当に幸せな気持ちです。毎日家族で、神殿参入の目標に向かい、朝に夕に祈りの生活を送っています。私をここまで導き助けてくださった福島、仙台、新潟の兄弟姉妹や宣教師の方々に心から感謝します。(やまだ・ただし 1952年生まれ、新潟第2支部書記補助)



- (写真上)1月に召された日本人宣教師 7名
- (下)2月に召された日本人宣教師 13名

◆『「末日聖徒イエス・キリスト教会』という啓示によってもたらされた名前に新たな注意を喚起し、この名を広く用いていくならば、教会は全世界的な規模で成長し、発展していくでしょう。さらには、多くの教員が伝道活動を行うことによって、一層多くの、ふさわしい改宗者のバプテスマが実現するでしょう。』

(大管長会の声明「会員伝道クラス教師用手引き」p.2)



一宮ワード部 教会堂 増築完成

宮市は名古屋市と岐阜市のほぼ中間、愛知県の北西部に位置し、木曽の清流と豊かな尾張平野に育まれ、伝統ある織

維の町として繁栄してきました。教会堂は尾張一宮駅から徒歩で約15分、名神高速道路一宮インターチェンジから車で約15分の場所にあります。

最初この地に回復された福音が伝えられたのは約10年前。名古屋第3支部（現在、名古屋第3ワード部）の付属支部として会社の寮の一角を借りて開設。その後伝道が進み、半年後には独立支部となり、翌年には現在の土地が購入されました。東京神殿の献堂式の時期に教会堂の一部が完成し、その後3年を経て現在のような



立派な教会堂となりました。これまでの多くの兄弟姉妹の犠牲と奉仕、信仰の賜を心より感謝しております。

教会堂を建築するために地下に何本もの杭が打たれ堅固な土台が造られたように、私たちの信仰も大きな改心（アルマ5：14）をみるとことによって初めて確固としたものになるのです。

この聖句の意味をよく心に留めて目標を明確にし、活力をもって前進したいと思います。（名古屋西ステーキ部一宮ワード部監督・日比野智）

編集室から

●皆様の家庭ではどのような「家庭の夕べ」を行なっていますか。思い出に残る「家庭の夕べ」はどのようなものだったでしょう。新しく出版された「家庭の夕べアイデア集」はどういうに役立っていますか。「我が家家の家庭の夕べ」と題して原稿をお寄せください。

●そのほか各地の催し物、すばらしい体験や

証を持っている方を電話か葉書きで「聖徒の道」編集室へお知らせください。こちらから取材するか、あるいは直接該当者に原稿依頼いたします。6月号掲載分の締切は4月10日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入してください。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」
編集室。TEL03-440-2351(代)。

名古屋西ステーク
一宮ワード部教会堂

(1983年10月20日完成)

愛知県一宮市新生町3-2-7

TEL 0586-44-0917

◇敷地面積：982.757m²

◇建築面積：403.519m²

◇延床面積：597.030m²



一宮ワード部礼拝堂

モーラは、パナマ沿岸沖に浮かぶサンプラス諸島のインディアン、クーナ族に伝わる刺繡の伝統芸です。これは、長方形に裁断した数枚の織物を重ね、一番上の布地の色（普通は赤）が見えるようにします。最初の布に一定の模様や線の切り込みを入れ、2番目の布の生地（普通は黒）が見えるようにします。黒い布地の部分にさらにひとまわり小さい切り込みを入れて、3番目の布地の色（普通は黄色）が見えるようにします。この作業を織物を5枚重ねたときはその数だけ進めていきます。切り込みを入れた縁は中に折り込まれて、ほとんど見えないくらいの何百という縫い目で留められます。ひとつとして同じモーラはありません。一つ一つがみごとな芸術作品です。モーラに描き出される図柄は、日常生活の情景から他の芸術品の模写、写真や雑誌、広告のイラストレーションにいたるまで様々です。この地域に福音が宣べ伝えられるに従って、教会に関連したテーマがモーラの図柄に取りあげられるようになってきました。ここに描かれたアロン神権の回復と題するモーラはある求道者の作品で、大きさは381ミリ×355ミリあります。他のすべてのモーラ同様、ブラウスの前か後ろの装飾用に作られています。

